

# 國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵『讃州矢嶋之図』の紹介と考察：屋島合戦伝承の一資料として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野中, 哲照 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000692">https://doi.org/10.57529/0002000692</a>

# 國學院大學図書館所蔵 『讃州矢嶋之図』の紹介と考察

——屋島合戦伝承の一資料として——

野中哲照

## 一 『讃州矢嶋之図』の概要

國學院大學図書館に収蔵されている『讃州矢嶋之図』（以下、國學院本。あるいは当該図）は、讃岐国屋島すなわち香川県高松市の屋島周辺を描いた古地図である。『平家物語』（以下、『平家』）卷十一「嗣信最期」「那須与一」の舞台として有名な地域であり、当該図にはその関係の史跡が描きこまれている。

### 1 書誌

畳み物。全一枚。広げた状態の寸法は、南北方向を縦とし、東西方向を横とした場合、縦八〇・五cm、横八九cm。縦三つ折り、横六つ折り。折り畳んだ状態の寸法は、縦二七cm、横一五・三cmの縦長の長方形。表紙・裏表紙は光沢のある斐紙、白茶地刷毛目。題簽は表紙中央に配置され、無地で、「讃州矢嶋之図 諏訪社」と書かれている。ただし、原表紙、原題簽ではないと考えられる（後述）。現状では帙に収められており、それに題簽があるが外題（帙題）の文字は書かれていない。蔵書印「國學院大學図書館印」。

## 2 描出範囲とその中心

題簽の表題には「矢嶋」(屋島)とあるが、屋島の東側の五剣山(八栗山)のある庵治半島あじまで描き、南は瓜生山まで収めていることから見て、当該本の中心は屋島と庵治半島に挟まれた入り江であると考えられる。この入り江は、古来「檀いの浦」と呼ばれている。今でこそ屋島と県本土はほとんど陸続きになっているが、当時は文字どおりの島であった。江戸中期に入浜式塩田のための干拓が行われて陸地面積が増大し、島であった痕跡は相引川として面影を残すのみとなっている。

大づかみに見て、入り江を中心にして、東、西、南の陸地を描いてあるので、入り江が中心といえるわけだが、書き込まれた地名の方向からみても、そのことを裏づけることができる。すなわち——北を天(上辺)、南を地(下辺)とした場合——屋島側の地名は当該図の左辺側を、八栗半島側の地名は同じく右辺側を、瓜生山側の地名は同じく下辺側を、それぞれ頭にして書かれている。

## 3 彩色

白描に近いが、山、海、林、樹木、街道筋には、薄い彩色が施されている。

## 4 改装の痕跡

現状では縦三つ折り、横六つ折りであるが(先述)、現状の折り線と異なる古い折り線の痕跡がある。それによると、縦四つ折り、横四つ折りであったとみられ、折った状態では縦二・二cm×横二・三cmのほぼ楕形であったようだ。料紙の

東南角の縦二一cm×横二三cm分が甚だしく破損しており、ここに貼られていた原表紙を改装の際に剝がした痕跡だと考えられる【図1】。つまり、現状の表紙は原表紙ではなく、題簽も原題簽ではないことになる。当該図には虫損の補修、裏打ちがみられるので、その作業が行われた際に料紙のそれ以上の破れを防ぐために折りの位置が変更されたのだろう。また、右の二通り以外の折り線もみられ、折りの位置は何度か変更されたようである。

## 二 推定製作年代と製作意図

屋島周辺を描いた古地図・絵図はいくつか知られている。それを製作年代（推定を含む）の順に並べると、次のようになる。それぞれの【略称】も各行末に示す。

- (1) 國學院大學蔵『讃州矢嶋之図』 〔國學院本〕
- (2) 香川県立図書館蔵『徳川末期時代の我香川県の地図』（文献名は後世の命名） 〔県図本〕
- (3) 洲崎寺蔵『讃岐国古地図』 〔洲崎寺本〕
- (4) 『伊能大図』（屋島の測量は文化五年（一八〇八）） 〔伊能図〕
- (5) 『金毘羅參詣名所図会』（弘化四年（一八四七）） 〔金毘羅〕
- (6) 『讃岐国名勝図会』（嘉永七年（一八五四）） 〔名勝図会〕

これ以外に、金刀比羅宮蔵『寛永讃岐国絵図』（寛永一〇年（一六三三））、京都大学図書館、岡山大学池田家文庫、聖心女子大学図書館、高松市歴史資料館などに類書があるが、屋島周辺の精密な海岸線や史跡表示がないので、ここでは除外

する。

地形の変化だけでなく、「牟礼郷」↓「牟礼村」の表記の変化も製作時期の指標とした。どの時点で「牟礼郷」から「牟礼村」へと変化したのかは不明だが、「郷」が中世的な呼称の名残りであること、「村」が明治期に続く呼称であることは動かないので、「郷」↓「村」の順序とみられる（ただしこれを指標として絶対視しない）。（2）県図本はその名称の中に「徳川末期時代の」を含むが、伊能図以降は「牟礼村」と記すのに、これは「牟礼郷」としているので、伊能図より古いものと推定しうる（たとえば江戸初期の古地図を元にしながら高松城周辺にのみ中期・末期の情報が書き加えられて江戸末期の作と鑑定される場合がある。典籍に重層的な形成過程を窺うのか、あるいは最終成立年次でみるのか、その立場の違いがある。注22参照）。「牟礼郷」と記している絵図に（2）県図本と（3）洲崎寺本があるが、その前後関係は暫定的な案である。（5）金毘羅と（6）名勝図会はそれぞれに地理的特徴のデフォルメが著しいが、七年の間に地形が大きく変容したり、史跡の位置が変更されたりするとは考えにくいので、相互補完的に活用すれば幕末の実景を窺いうるものと考えられる。

屋島周辺では江戸中期から入浜式塩田が盛んで、それに伴う地形の変化が地図の製作年代を見きわめる指標になる。その塩田は、宝暦五年（一七五五）に高松藩五代藩主松平頼恭よしたかの命によって梶原景山が拓いたことに始まる。ただし、その際は屋島の西側が対象であったので、屋島合戦の舞台である屋島東側（檀の浦）の塩田は、それより後れて開発されたとされる。高松市（一九六〇）や日本たばこ産業高松塩業センター（一九九二）によれば、この塩田開発は寛延三年（一七五〇）に牟礼南浜の古浜塩田に始まった。牟礼とはいつても琴電八栗駅の南側の、東西方向の塩田開発のことであり、まだ高橋（見返橋）周辺の海岸線が変容するものではなかった。その後しばらくは湧元から屋島西町のほうに開発の中心が移り、宝暦三年（一七五三）に屋島湧元塩田（琴電志度線湧元駅周辺）、同四年に亥ノ浜塩田（亥

の浜公園周辺)、同五年に子ノ浜塩田(屋島総合病院周辺)が開かれた。これに対して屋島と庵治半島に挟まれた檀の浦の塩田開発の時期ははっきりしないが、伊能忠敬が屋島周辺を測量したのは文化五年(一八〇八)十月七日のことで(『伊能忠敬測量日記』)、伊能図にその塩田が描かれているので、檀の浦周辺の塩田開発は一八世紀後半に進んだと考えられる。そして、**國學院本には、その塩田が描かれていない。**当地を描いた現存の古地図では、『寛永讃岐国絵図』は別にして屋島周辺に限定した詳細な絵図で塩田が描かれていないのは、管見に及ぶかぎり唯一の作例である。よって、**國學院本は塩田開発が始まる前の、一八世紀前半かそれ以前の製作と推定しうる。**

このことから國學院本は、屋島周辺の現存古地図の中でも最古の部類に入ると考えられる。伊能図のように製作時期が明確な地図を絶対編年とし、それらとの前後関係で年代が定まる相對編年の考え方を合わせると、おもな屋島周辺の古地図・絵図は、右のような年代順で示すことができる(屋島合戦関係の史跡が描きこまれたものに限る)。

もう一步、踏み込んでみる。國學院本に記された『平家』関係の史跡をみると、「惣門(総門)」「いをち(射落島)」「次信やきば(次信焼き場)」「源氏はな(源氏鼻)」「いのり岩(祈り岩)」「内裏屋敷」「次信石塔」「くらかけ松」がある。そのうち、佐藤次信<sup>(2)</sup>関係の「次信やきば」「次信石塔」に注目する。現在、次信墓<sup>(つぎのみほか)</sup>は、屋島側の安徳天皇社の西北西(屋島東町四〇〇番地)と、琴電八栗駅の南(牟礼町牟礼三三九五番地)の二か所ある。本稿では両方を総称して次信墓と称し、呼び分ける必要がある際には屋島墓、牟礼墓と呼ぶことにする。さて、國學院本で屋島墓の「次信石塔」と牟礼墓の「次信やきば」の二か所に、松平頼重が建立した四角柱の石碑が描かれていない。もちろん石碑の描出が省略されることはありうるのだが、絵があるかないかだけの問題ではない。「次信やきば」は火葬場であつて墓とは違うものだろう。松平頼重は、そこに石碑を建てたのである。ということとは、とくに牟礼の「次信やきば」の表記については、頼重が石碑を建てる前の状態を示しているのではないだろうか。

松平頼重は寛永一九年（一六四二）二月二八日に常陸下館城主から高松藩への転封が決まり、五月三日に江戸を出て、同月二八日に高松城に入った（『増補高松藩記』）。この年の七月には男木島、石清尾山いわせお、瀬居島方面を巡っていることから、入部早々、領内を巡見していたさまが窺える。次信墓は二か所とも頼重の命によって寛永二〇年（一六四三）に建立されており、石工によって石碑が彫られ現地に基礎を築いて石碑を建てるのに数か月を要することを考えると、**國學院本は一六四二年の秋冬ごろに描かれたものと推定するのが妥当**だろう。領内の巡見中に現地の屋島合戦伝承の存在を知った頼重が、絵師に命じて描かせたようだ（屋島墓の碑文の内容）。

製作意図については、明確な像を結ぶ。当該図は、源平の屋島合戦の史跡を中心に描きこまれている。たとえば、屋島の東西を横断する廻路道が一本だけ描かれているが、もちろん当時の廻路道がこの一本しかなかったわけではない。屋島寺に上る道はおもなものだけで六本は知られており、中には弘法大師の伝承をもつ古道もある。それらを図の中に描かないで、「次信石塔」と「内裏屋敷」の位置関係を示すための一本だけを描いたとみられる。ほかに白羽神社（名勝図会では「八幡宮」）が当時も存在したはずだが、「源氏はな」などと屋島合戦にちなんだらしき名称のみを記している（第一〇節第1項）。

このように、**当該図は源平の屋島合戦の史跡の所在を伝えるために描かれたもの**とみることができるといえる。右の推定製作年代と合わせて考えるならば、源氏の末裔である松平頼重に源氏奮戦の古跡を紹介するために描かれたものと考えられる。そして、製作過程において主導的役割を担ったのが、諏訪社の神職（次節）であったという推定も十分成り立つ。同じような絵図を二枚描かせて、一枚を藩主頼重に献上し、副本は諏訪社の神職が保持していたのかもしれない。製作された当該図が頼重の心を動かし、二か所の次信墓の建立の契機になったという流れを推定することができる。

もちろん、頼重入部以前の製作（二六四二年以前）である可能性もなくはないが、松平氏の入部以前に高松藩主であったのは生駒氏（藤原姓）であり、当該図に源氏関係の史跡が中心に描かれていることからみて、その可能性は低い。だとすれば、当該図の製作時期は一六四二年秋冬と考えてよいことになる。

### 三 成立圏

題簽に記された「諏訪社」は、おそらく栗林公園の東正面にある諏訪社だろう（高松市栗林町一―八一―二）。現地の碑文や香川県神職会（一九三八）を総合すると、当社は松平頼重の命によって高松城内の巽（東南）に創祀され、享保一四年（一七二九）に独立した社地を与えられて現在地に移転した。公式には享保一四年の創祀ということになっているが、その前身は頼重時代から存在していたということである。國學院本はそもそも頼重による屋島合戦の史跡整備にかかわって製作されたものらしいので、いくつかの「諏訪」を名乗る県内の神社の中でも、頼重創祀の由緒をもつ当社が最有力だろう。ただ、火災や空襲を経て社家は早くから断絶しており、現在では石清尾八幡宮の末社になっている（香川県神社庁）。

### 四 史料的価値

國學院本の史料的価値については、前節までに次の三点がすでに出ている。

- (1) 屋島周辺の史跡を記したおそらく現存最古の地図である。

(2) 塩田開発以前の当地の海岸線を留める貴重な古地図である。

(3) 推定ではあるが製作年が明瞭な像を結ぶ。

これらに加えて、

(4) 江戸初期の現地の史跡の位置を忠実に反映している可能性が高い。

という点も指摘することができる。これについて、本稿では大きく分けて二つのことを指摘する。第一は牟礼側の那須与一の扇的ばなしの史跡の変容過程である(第五〜七節)。第二は、佐藤次信の墓・供養塔が屋島側と牟礼側にまたがっていることをどう考えるかという問題である(第八節)。ほかに、現地史跡が『源平盛衰記』(以下、「盛衰記」)の影響を受けて整備されたこと(第九節)や、それ以外に國學院本から読み取れる重要な点(第一〇節)について指摘する。

## 五 牟礼の海岸線認識の変容

いま挙げたうちの第一、すなわち牟礼側の史跡の変容を考える際に、前提的に踏まえておくべきことがある。塩田開発に伴って、江戸中後期の人々の海岸線についての認識も変容したらしい。

### 1 忘れ去られた洲の存在

國學院本には、南北方向の三本の洲が描かれている。西から順に、一本目は「惣門」を西岸を含む洲(図2)のX)。二本目は「いのり岩」を北側に含む洲(同Y)。三本目は洲崎寺を西岸を含む洲(同Z)。これ以外に、「いをち」のあ

る浅瀬がYとZの間にみえるが、これは洲ではなさそうである（水辺の葦が描かれていて、陸地と海の境界が不分明なところも多い）。江戸中期以降の塩田開発によってこれらの洲や浅瀬の存在は完全に忘れ去られ、当地の人々の空間認識は大きく変容したようだ。

「惣門」を含むXの洲については、「惣門」（現地史跡「総門跡」）が移された問題につながるので、次項で述べる。

次に、「いのり岩」を含むYの洲について。国土地理院地図の陰影起伏図【図3】を見ても、洲崎寺の西約五〇メートルにある浜北公民館から北の岡田建設の手前まで南北に微高地が続いており、現在ここは与一公園として整備されていて、たしかにその東西と比べて標高の高いことを確認しうる。東西の道路との比高差が約一〜一・五メートルもあるので現状ではさすがに「洲」とは言いがたく、おそらく塩害から集落を守るために（防風林・防砂林のような発想で）盛り土がされたのだろうが、位置的にはかつての洲の上に土が盛られたものとみてよい。<sup>4</sup>ここに那須与一伝承が濃密に残存していたためか、与一公園の北に与一北公園があり、その園内には扇池が整備されている。この南北方向の洲の北端付近に國學院本の「いのり岩」が存在したことになる。現地の高低差や洲崎寺との位置関係を勘案すれば、それは与一公園の最北端の一段高くなっている、道路との比高差二メートルほどの小丘であろうと推定しうる【図3・図4のA地点】（現地史跡「祈り岩」から西に約八〇メートルずれている点については後述）。國學院本でも、この「いのり岩」付近の地形が高く、その南北は低く描かれている。

國學院本では、「いのり岩」から幅を広げてさらに北に洲が延び、徐々に海に没していくように見える。干潮時だけ姿を現すような洲があったのかもしれない（これが恒常的な陸地であったなら「いのり岩」が沖の扇的を目指すような、北端意識<sup>5</sup>を醸成する場所になりえない）。

次に、Zの洲をみると、洲崎寺は、その名のとおりこの洲の西向きの先端に立地している。國學院本の江戸初期に

すでに洲崎寺の地は、洲の崎（先端）ではなくなっていたようだが、現在の洲崎寺境内の西側に墓地があり、そこが西に突き出た口ばし状の地形の痕跡であるようにみえる。浄土思想の影響か、西側の海や川に死者の御霊を流すところが全国にみられる（平安期の浄土思想は天台宗にも真言宗にも深く浸潤していた。また、もとは西に限定されず、沖の島に向けて流す龍宮信仰的なものであった）。

國學院本によれば洲崎寺のすぐ西側は海だったということになるが、実際の現地でも洲崎寺の西側は低い土地であり、そこは南北方向に浅い谷のような地形をなして、國學院本と一致する。國學院本によれば、この細長い入り江は洲崎寺の南の牟礼交差点か勝橋（かちばし）の北詰あたりで東へと向きを変えて回り込んでいたことになる。ここまで含めて、國學院本は現在の地形と符合するといつてよい。

國學院本の描く地形が、当時のそれを忠実に写したものである（と考えられる）ことを示す材料は、ほかにもある。「本高松」と「高松」が書き分けられているらしい点である。國學院本の「高松」が現在の古高松だとみられるが、そこに西から東（左から右）に向けてカニのハサミのような洲が突き出している。現在、高松町の交差点から東に向けて国道11号線（志度街道、高松北バイパス）と県道36号線（牟礼中新線）が枝分かれしているのだが、それがこのハサミ状地形の痕跡であるようだ【**図5**】。この二本の道路に挟まれた東西方向の地域は、現在でも低標高であり水路が走っている。海部医院（かいふ）の東へ高松東郵便局のあたりは、ハサミの間の海であったことになる。國學院本は、このように江戸初期の当地の地形を詳細に復元しうる可能性がある。

もちろん、國學院本にも問題がないわけではない。伊能図以前の古地図の一般として、距離も方位もすべて正確に描かれるということはまずない。國學院本の「いのり岩」の位置が対岸の「次信石塔」と同緯度に描かれているのがその例で、実際には、**図3・図4のA地点**（國學院本の「いのり岩」の北西に佐藤次信の墓（國學院本の「次信石塔」が

ある。しかしそれは、「いのり岩」が「惣門」「すさきの堂」との位置関係から、もう一方の「次信石塔」が「たんの浦」「内裏屋敷」との位置関係からそれぞれ描かれたゆえに生じた誤差だろう。総じて、屋島側に比べて牟礼側のほうがゆったり描かれている。そのように、どこまで忠実なのか慎重に検討しなければならない点はあるものの、江戸初期の現地の地形や史跡の位置を知るうえで貴重な情報が國學院本には含まれている。

## 2 総門跡・射落島的位置の東遷

総門跡、射落島場所は、それぞれ約五〇メートルずつ東へと移設されたい。國學院本によれば元の位置は、海寄り県道<sup>(5)</sup>沿いになる。國學院本のこのあたりは洲の形状が丁寧に描かれていて、そこに書き込まれた地名がいい加減なものとは考えにくい(先述)。このことを前提とすれば、國學院本では「すさきの堂」(洲崎寺)より西向きに二本先の洲(Xの洲)の水際に「惣門」が立っていたことになる【図6】。そして、現在の総門が、かつての「いをち」(射落島)の位置に相当することになる。距離間隔を変えないことなく、約五〇メートルずつ東に移設されたことになる。

そして、國學院本のいう「惣門」は「いをち」より西にあったはずである。地形の起伏(洲の推定)、県道の付き方、射落島からの方向や距離を勘案すると、海寄り県道の「ことでん八栗駅前」の北行き方面バス停のそばに、近代的に整備されたものとは思えない曲線のな道がある。この曲線は水路に規定されて成立した小道だが、これに囲まれた地が、かつての総門跡の地である可能性が高い。しかしそれは國學院本が描かれた近世初期のことであって、幕末の名勝図会では、すでに現存史跡と同じ位置(相引川から後退した内陸側)に「惣門」「射落島」が描かれている(この移設事業は文化・文政期だとみられる。後述)。

「総門跡」「射落島」が西から東に移されたとすれば、その理由は一つしか考えられない。江戸中期以降の塩田開発

によって、海岸線の認識が変容したからだろう。「総門跡」に関するすべての絵図・史資料は、これが海沿いにあると記している。國學院本が描くように江戸初期にはX・Y・Zの洲が存在していてXの西側に海岸線の認識をもってしたが、江戸中期以降あたり一面が塩田になるとかつての洲の存在が忘れ去られ、洲崎寺前の市道がかつての海岸線であるとの認識が生まれたのだろう。

### 3 祈り岩の東遷

那須与一が扇の的を射る際に神々に祈ったとされる場所が、「祈り岩」である。國學院本ではXの洲(与一公園)の北端にそれが描かれているのだが、現在の「祈り岩」や「駒立岩」は明らかにそれよりも東側に移されている(第六節第5項)。距離にして約八〇メートルである。

前項と合わせて考えれば、「総門」も「祈り岩」も西から東へと数十メートル移動したことになる(もとの「いのり岩」を与一公園北端に残したまま、山寄り県道沿いに新たに「祈り岩」が設けられたので、移設ではない。認識上の移動と呼ぶ)。

### 4 義経弓流しの地の東遷

國學院本に描かれているわけではないが、「義経弓流しの地」も西から東へと移動したらしい【**図7**】。そもそもこの逸話は海上が舞台なので陸上に史跡があるはずもなく、一七四七年の『翁嫗夜話』、一七六八年の『三代物語』、一八二八年の『全讃志』に「弓流し」の立項すらなく、一八九八年の『屋島名勝手引草』に(鏃引きの地とともに)「現今、其所、詳らかならず」としている。このことから「弓流しの地」は古い史跡ではなさそうである。おそらく幕末の名勝図会が初出で、これだと高橋(見返橋)と明神橋の中間付近である。『牟礼町史』旧版(一九七二)に「弓流しのあつ

た場所は間島太郎氏宅より西約三十メートル位の当時の相引川中（七八頁）とあるのは、その説明であるようだ。『新修高松市史』（一九六四）は「高橋付近」と明記し（二八九頁）、『牟礼町史』新版（一九九三）の「源平古戦場図」も高橋（見返橋）と明神橋の間にその地点ポイントを置いているように見える。ところが現在では、洲崎寺の南一〇〇メートルほどの道路沿いになっている（『牟礼町史』旧版（一九七二）八六頁の「牟礼町名所・旧跡分布図」、新版七七七頁「牟礼町の史跡と名勝」は現在地を示す）。これも、洲崎寺前の市道がかつての海岸線である、との認識によって引き寄せられたものと考えられる。

## 5 景清鍛引きの地（大砂子）の東遷

悪七兵衛景清（平家方）が、逃げようとする三保谷十郎（源氏方）の兜の鍛をつかんで離さず、三保谷もそれに抗し、兜の鍛が引きちぎれて逃げたエピソードの地が、当地では「景清鍛引きの地」と呼ばれている。「大砂子」の異名もあるが、命名の由来は不明である（大きな砂粒の浜か）。

明和五年（二七六八）の『三代物語』では、「悪七兵衛景清と丹生谷十郎（二に二王屋に作る、また三保屋に作る）組み合ひ、兜の鍛をつかんで互ひに引くや、相引の所なり。今に明神あり。九月十五日、相撲あり」（原文では読みにくいので釈文化した）とある。「相引」は高橋（見返橋）から南にかけての地名で、この項目の冒頭に「大砂子 牟礼」とあるので、高橋の東岸の南寄りに「明神」があったのだろう（現在、高橋の南に明神橋がある）。鍛引きにちなんだ相撲大会が九月十五日に行われていたというので、一時はここに定着した伝承だったのだろう。文政十一年（二八二八）の『全讃志』もこの地を「牟礼」としつつ「今、その地に明神の祠あり」としているので、同じ認識である。

ところが、明治三二年（二八九八）の『屋島名勝手引草』には、鍛引きの地を（弓流しの地とともに）「現今、其所、詳

「らかならず」と記している。おそらく、この間に「明神」が廃絶してしまったのだろう。しかも、明治四二年（一九〇九）版の『香川県史』第二編は「大砂子」（景清鋳引きの地）を屋島側としている。「景清鋳引きの地」が現在地に定着したのは、大正期か昭和戦前のことかもしれない。そしてそれは、やはり、洲崎寺の前の市道がかつての海岸線であるとの認識によるものだろう。現地史跡「景清鋳引きの地」が市道沿いではなく、山寄り県道沿いであるのは、当時の渚から陸へと少し上がった地がそこであろうという物語の読解によるものと思われる。

## 6 二つの海岸線認識

以上の2と5は、当時の海岸線が洲崎寺門前の市道30号線（牟礼海岸線）であったとする認識に基づくものと考えられる【図3・図4・図6】。江戸初期までの海岸線認識は現在の「海寄り県道」であり、江戸中期以降は洲崎寺前の市道に変わったと考えられる。認識が変容すれば、それに伴って整備される史跡の位置が変わるのも当然のことである。また、本節第1項で述べたように、洲崎寺の墓地を西向きの口ばしと見立てうる古代の海岸線が、ここに存在した。これを加えると、牟礼の海岸線認識は三つあったことになる。われわれも「昔はくであった」と言いがちだが、いつの時点の「昔」なのかを限定することの難しさを教えられる事例である。

塩田開発の件とは別に、〈屋島の平家〉（牟礼の源氏）の構図や、能登守教経が西から東へと攻め込んできたとする空間認識も後次的に加わって（後述第七節）、往古の海岸線だと認識されていた市道が源平の攻防ラインだと捉え直され、その認識によって史跡の再整備が行われたようだ。海岸線認識の変容に伴って史跡「総門跡」「射落島」「祈り岩」が移設されたのは文化・文政期だと考えられる（後述第六節第六項）。「義経弓流しの地」「景清鋳引きの地」が現在地に移ったのは、それらを追った結果ということになる。

## 六 那須与一関係伝承の変容

### 1 〈南北の物語〉から〈東西の物語〉へ

一般的な『平家』（寛一本）においては、屋島の入り江の奥に立つ那須与一が、北である沖から向かってきた平家方の船と対峙した物語であるように読める。つまり、〈海の平家／陸の源氏〉は〈北の平家／南の源氏〉と置き換えることができる。より丁寧に説明すると、平家方すなわち「沖のかたより」向かってきた「舟」を「横様になす」の表現が決定的である。これは、沖から陸へと進んできた舟を停止させ、進行方向を直角に曲げることを意味する。「那須与一」における「沖」とは、「沖には平家…、陸には源氏…」と二度も表現されるように、「陸」と対置されるべき「沖」である。よって、本文に「折節、北風激しく吹きければ」とあるのは、与一が「向かい風」を受けたことを表したものだということになる。「沖のかたより」——「横様」——「北風」の位置関係ならば、〈北の平家／南の源氏〉という南北の関係に違いないだろう。

当然のことをここでわざわざ説明するのは、現地では、〈東〉に立つ那須与一が〈西〉の扇の的を射た物語であるかのような空間認識を示す史跡「祈り岩」「駒立岩」「的場」が存在するからである。〈西〉側すなわち屋島側に平家が拠っていて、〈東〉側すなわち五剣山側に源氏が布陣しているという〈東西の物語〉であるようなのだ。かりに、現地史跡のように、駒立岩のところ（東側）に与一が立って、屋島（西側）から平家の舟が進んできたとするならば目と鼻の先の陸地（約五〇〇メートル）からの接近になるので、「沖のかたより」と表現することはありえない。このようなことから、『平家物語』の世界では〈南北の物語〉であったはずなのに、現地史跡では〈東西の物語〉に変容している点を指摘することができる。

当地の那須与一関係史跡では、「祈り岩」と「駒立岩」がある。「祈り岩」は、与一が〈神頼み〉をした場所だという意味づけなのだろう。市道30号線は往古の海岸線だと認識なので、「祈り岩」はかつての海岸近くにあったものとして設置されたようだ。そして「駒立岩」は、当時は海上にあったこの岩まで馬の脚を進めて、与一が矢を放った場所ということらしい。そして、「駒立岩」から約七〇メートル西に、船上で扇の的を立てた竿をもった女房の姿が描かれた板が立てられていて、「的場」と称されている。これは、完全な〈東西の物語〉である【図8】。那須与一が射た扇の的までの距離は二〇メートル説と七七メートル説があるが、現地では後者の説を採っているというわけである。<sup>6)</sup>

## 2 消えた「八丁石」——江戸中後期の北岸の推定と合わせて——

國學院本には「八丁石」が描かれているが、現在では完全に失われてしまっている。國學院本以外の古地図にもその名は見えない。<sup>7)</sup> 一丁が一〇九メートルであるとすれば「八丁」は約八七二メートルになるわけだが、周囲八〇メートル以上もあれば石でも岩でもなく島と呼ぶはずである。ゆえに「八丁」は、どこからの距離によって付けられた名称だろう。國學院本の「いをち」（射落島）には「惣門より七八間」などと惣門（総門）を起点にした説明が見えるのだが、この「八丁石」は「惣門」からちようど八丁ほどの距離にある（現地史跡「総門跡」から宮北川の河口まで。この推測が正しいとすれば、國學院本に描かれた江戸初期の傘礼の人々の空間認識は、「惣門」を中心に形成されたものであったのかもしれない）。

じつは、伊能図の「馬立石」は、國學院本の「八丁石」と同一のものである可能性がある。少なくとも伊能図の「馬立石」が現地史跡の「駒立岩」を描いたものだと考えられない。なぜならば、この「馬立石」は明らかに現地史跡

より西、あるいは北にずれているからである【図9】。伊能図の「馬立石」は國學院本の「八丁石」の位置に近い。かりに海上の岩が陸地から数メートルしか離れていないものであったとしたら、このような描き方にはならず、岸と接するように描くはずである。伊能図は実測図なのである。しかも、伊能図ではこの陸地の北岸がほぼ東西方向のラインである（現在のような西北西―東南東の宮北川ラインではなく）。昭和二九年、昭和三九年の写真によると、宮北川の河口左岸に岩塊が見える【図10】。これが、「八丁石」＝「馬立石」の残骸だと考えて間違いないまい（水の出口を土木工事によって塞ぐとは考えられず、自然の岩塊がそこにあったから残ってしまったとしか考えられない）。宮北川河口の岩塊、「八丁石」（國學院本）、「馬立石」（伊能図）の三者が同じものだとすると、伊能図の時点での塩田開発はそこまで北進していなかったことになる。その北進ラインを陰影起伏図から推定すると、おそらく与一公園と与一北公園の間の道路だと考えられる（つまり、与一公園と与一北公園は道路によって分断されたのではなく、もともと二段階で埋め立てられた痕跡だとみる）。細かく見れば、伊能図は東西にまっすぐな直線ではなく、小さなクランクを成している。

時代的に國學院本と伊能図の間に入りそうなものが、県図本である。粗雑な筆致の絵図だが、伊能図の小さなクランクと同様、洲の先端のツノのような地形が残存している。これは、伊能図ほどに北岸が整備される以前の姿を留めたものと考えてよい。だとすれば、北岸の整えられてゆく順に國學院本→県図本→伊能図ということになる【図8】。

ところで、現地史跡「駒立石」から西北西に延びる宮北川の方向は不自然である。庵治半島西岸には類似の小河川・水路がいくつかあるが、いずれもほぼ真西に向かって流れている。人工の水路は、土木工事を容易にするために、あるいは水勢の確保のために、最短経路で海や本流に流すことが多い。この不自然な水路の向きは「八丁石」＝「馬立石」を指して南側から陸地が伸びたために、結果的にこの方向にならざるをえなかったのではないだろうか。

以上を整理すると、次の四段階になる。國學院本の書かれた一六四二ごろは南北に細長い洲しかなかったが〔第

一段階)、その洲のツノを残しつつ東西が干拓され(これが県図本)(第二段階)、伊能図の一八〇八年ごろまでに北岸が整えられてツノの痕跡が小さなクランクでしかなかった(第三段階)。その北岸は与一公園と与一北公園の間のラインであった。その後、おそらく「八丁石」(馬立石)まで干拓を北進させようとの意図によって北側の一帯(もくもく遊らんどとらいうある・げんべい観光案内所、岡田建設、与一北公園、牟礼浄化苑の北半分)が「八丁石」||「馬立石」の手前まで埋め立てられてしまった、そしてそのために西北西向きの水路が生じるものとなった(第四段階)という推定である。その次の段階でさらに北側の久通浜塩田くずはまが干拓された(第五段階)。その際、排水のために宮北川が新設された(完全に埋め立てずに海を残した部分が宮北川になったと言っべきか)。このように、消えた「八丁石」のその後を推定することができる、当地の埋め立てのプロセス、水路の形成過程も推定することができる【図6】。

この一件にこれほど拘泥するのは、那須与一の扇の的ばなしが〈南北の物語〉から〈東西の物語〉へと変容した要因に地形の変容問題が深く関わるからである。伊能図の「馬立石」は——庵治半島西岸沖というよりも——塩田地帯の北と言ったほうがよい位置にあることから、かろうじて〈南北の物語〉として扇の的ばなしが語られていたのではないかと推測される。つまり、与一は南側から騎馬で北上して「馬立石」に立ったという推定が成り立つ位置関係である(この石が庵治半島西岸に近ければ、半島側から与一が海に入った〈東西の物語〉となるが、そうではないということ)。

### 3 二つの岩の発生と伊能図・県図本の位置

〈南北の物語〉から〈東西の物語〉への変容問題に関連して、「祈り岩」「駒立岩」二つの岩が存在することは問題である。國學院本には「いのり岩」だけが描かれていて、「駒立岩」はない。ゆえに、祈ったその場所で与一が矢を放つたと解釈されていたものと考えられる。『平家』に忠実であれば、与一が馬を止めた場所と祈った場所は同じである

はずで、「祈り岩」と「駒立岩」を別々にするのは、なくもがなの付会である。二つの岩を描かない國學院本のほうが、『平家』世界に合致する。

では、なぜ「祈り岩」「駒立岩」の二つの岩を必要としたのか。これは、「祈り岩」「駒立岩」を二つ並べて与一の動線を表現するためではないか。われわれはノートに定規を使って線を引こうとする時、始点と終点を見定めて鉛筆を走らせる。人間の認知上、関係を持つ二つの点が存在すれば、自然にその間の「線」が発生する。そしてそれが人物の動く始点と終点ならば「動線」ということになる。〈南北〉と〈東西〉の違いこそあれ、県図本・洲崎寺本・金毘羅・名勝図会のいずれも与一の動きの手前が「祈り岩」であり、海へと進んだ先が「駒立岩」である。手前で神々に祈り、進んだ先で馬を止めて鏑矢を放った、という解釈になる。このように、二つの岩を必要とするということは、与一の動線を示す必要が生じたからだろう。

当地においてその必要性の発生を考える際、入浜式塩田のための干拓事業の影響だと考えるのは早計である。なぜならば、牟礼の塩田開発が開始されたのがおそらく一七六〇年代前後であるのに対して、箕輪野鹿の筆になる「いのり岩」「こま立石」が当地に設置されたのはそれより一世紀ほど早い一六七〇年ごろのことだからである。

そのことは次項で詳述するとして、國學院本が「いのり岩」だけ、伊能図が「馬立石」だけをそれぞれ描いている問題を解決しておく。どちらも岩石は一つだが、その名称が違っている事実は重い。伊能図の時期に現地の伝承から「祈り岩」が消えてしまったわけではないだろう。いま述べたように箕輪石碑「いのり岩」は——どこに設置されていたかは別として——伊能図の頃に当地に存在していたのである。ゆえに、伊能図はただその描出を省略しただけだということになる。伊能図に「馬立石」しか描かれていないのは、「祈り岩」が陸上にあつて特記しにくかったためだろう。

伊能図が描くこの陸地の北岸は微妙にクランク状であり、北西向きに突き出たツノのような地形が「馬立石」に向かっているようにも見える。そして、そのツノはおそらく与一公園の北端、すなわち國學院本の「いのり岩」の位置に相当する。伊能図が意識しつつも描かなかった「祈り岩」は國學院本の「いのり岩」と同じものであったということである。これだと、与一の動線としては、南東から北西へということになる。伊能図のころ、箕輪石碑「いのり岩」はまだ与一公園の北端に存在したのではないだろうか。

この推定を補強するのが、県図本・洲崎本の存在である。県図本・洲崎寺本は「祈石」「駒立石」を（南北）に並べている【図11】。洲崎寺本は岩の形状を描いておらず、文字でその所在を記すのみなので、ここでは洲崎寺本を県図本からの派生と考える。県図本・洲崎寺本ともに「イノリ石」「祈石」が南、「駒立石」が北で一致しているが、名称の近似性、洲の北端のツノとの位置関係も合わせると、北（沖）の「駒立石」は伊能図の「馬立石」と同じものだろう（県図本では「駒立石」より北にもう一つ島らしきものが描かれているが、これは庵治浜北村の南であるゆえ小丸山か）。

#### 4 鍵を握る箕輪石碑——石造物ゆえの動かぬ史料的价值——

前項に関連する問題がある。現地史跡には、「祈り岩」「駒立岩」のそばに添えられた石碑がある【図12】。史跡そのものではなく、史跡の所在を示す名札のようなものである。この二つは同一の筆跡で、箕輪野鹿みのわやろく（三野輪野鹿）の書であると考えられている（『牟礼町史』旧版（六一五頁）・新版（八〇四頁））。箕輪野鹿の生没年は未詳だが、松平頼重の家臣であるので、頼重が藩主であった寛永一九年（二六四二）～延宝元年（二六七三）の間に、これらの石碑も設置されたものと考えられる（明治四二年（一九〇九）版の『香川県史』第二編「名士」に箕輪野鹿の略伝があるが詳細不明）。「佐藤次信墓」碑、「維歳壬午」碑、「大夫黒馬埋處」碑の建立は寛永二〇年（一六四三）のことで、それと同時にこれらの石碑の整備ま

で一氣に行われたとは考えにくい。なぜならば、箕輪石碑は「いのり岩」「こま立岩」の二つ——つまり那須与一関係——しか見られないことから、次信顕彰とは別の、那須与一顕彰という指向に支えられた事業だと考えられるからである。したがって、松平頼重による屋島合戦の史跡整備は少なくとも二段階にわたって行われたものと考えられる。第一次から一定の時間（ここでは約三〇年間とみる）をおいて、一六七〇年前後の第二次で二つの石碑が整備されたのではないだろうか。

なぜ第一次と第二次との間を「約三〇年間」とみるのか（頼重治世の範囲内ならば一〇年間や二〇年間もありうるわけだが、そうではなく）について、説明しておく。國學院本には「いのり岩」しか描かれていないことから、一六四二年の時点では「駒立岩」は存在しなかったと考えられる。少なくとも「八丁石」を後世の古地図のように「馬立石」（伊能図）「駒立石」（県図本・洲崎寺本）に見立てる動きがなかったことは確かである。与一は、神に祈ったその場所（「いのり岩」）から扇的を射たと認識されていたものとみられる（先述）。「駒立石」は不要だったのである。ということは、箕輪石碑に「いのり岩」だけでなく「こまたて岩」も存在するということは、「祈り岩」と「駒立岩」を分かつて両者を併存させる、認識上の大きな変化があったことになる。そのためには、一世代分（約三〇年）ほどの時間の経過が必要なのではないか。このように考えて、暫定案ではあるが、頼重時代の第二次史跡整備を一六七〇年前後と考えておく。

ちなみに箕輪石碑は、金毘羅や名勝図会巻四の「八丁石」相当部分の脇に小さく描かれており【**図13・14**】、そこに箕輪石碑が設置されていたことは間違いない。ここで重要なことは、「八丁石」が「馬立石」「駒立石」に見立てられるようになったのは、塩田開発に伴う北岸の北進によるものではないということである。箕輪石碑の「こま立石」の存在が、その何よりの証拠である。早くも一六七〇年前後に「八丁石」が那須与一の「駒立石」と呼ばれるようになっていたのだ。

「八丁石」が「駒立石」と呼ばれるようになった理由は、那須与一の扇的ばなしをもっと濃密に語りた指向が噴き出していたからではないだろうか（いわゆるフィクションに踏み出しても、あるいはデフォルメが過ぎると批判されようとも）。いま想定している一六七〇年前後という時代相は元和・寛永ごろ（二六一五〜四四）に出された『平家』や『盛衰記』の版本（板本）が日本のすみずみまで行きわたり、寛文・延宝期（二六六一〜八二）の版本も重ねて刊行されるような時代相である。たとえばこの時期に——沖合いからではなく——対岸の「内裏屋敷」（國學院本）から扇的を立てた平家方の船がこちらに向かってきたというような認識（先述）が生じていたとしたら、國學院本の「いのり岩」から「八丁石」に向かう与一の動線をイメージすることは、むしろ自然なことである。「いのり岩」単独から「いのり岩」「こま立石」併存に移行するのは認識上の大きな変化だと述べたが、一六七〇年前後の「こま立石」の創出は、扇的が沖合いから来たのか対岸から来たのか、その物語構図の変容に伴うものであった可能性がある（後述するように、これは『盛衰記』の影響）。

箕輪野鹿の筆になる石碑は「いのり岩」だけであって「こま立石」は後世になって箕輪石碑に似せて偽造したのではないかと、念のため疑ってみる。両者の筆跡はよく似ており、大きさも近似しているように見える（干潮時であっても箕輪石碑「こま立石」の大きさは計測しにくいが、箕輪石碑「いのり岩」は縦二二cm×横三二cm×地上に出ている高さ約九五cm）。筆跡や石碑の大きさは似せることができるが、注目したいのは箕輪石碑の一方が「いのり岩」、もう一方が「こま立石」となっていることである。似せる意識があるのなら、どちらも「岩」にするだろう。現状の「駒立岩」は大きな一枚岩であり、「岩」と表現するにふさわしい。おそらく「岩」とは一枚岩を指す語であって、複数の石が集まったかたまりは総体が大きくても「石」としか表現できないのではないだろうか。このことは、はからずも箕輪石碑が現地史跡「駒立岩」に当初から添えられていたものではなく、「八丁石」に添えられていたものが移されたのであろうこと

を証明している。<sup>(9)</sup>

以上をまとめると、國學院本という「いのり岩」単独で那須与一の〈神頼み〉も〈扇的の射技〉も語っていた時代が一六七〇年ごろまでで、それは『平家』世界に忠実な再現であった。ところが、一六七〇年前後に〈神頼み〉の地と〈扇的の射技〉の地を分ける発想が生まれた。与一公園の北端に箕輪石碑「いのり岩」を建てるところまでは旧来の物語の追認であったが、「八丁石」を「駒立石」と呼び換えて箕輪石碑「こま立石」を建てたところが独創的な部分であった。これに続いて、「祈り岩」「駒立岩」そのものを移動させようとする時代が訪れる。

## 5 「祈り岩」移動の先行性

國學院本という「いのり岩」は洲の先端であって、それが与一公園北端の小丘(図3・図4のA地点)と一致することを考えると、現地史跡は五〇〇〜八〇メートルほど東(内陸側)に移動した可能性が高い。これは、牟礼側の海岸線の認識が西から東へと移動したことによる(先述)。國學院本と現地史跡のずれから割り出したものである。

一方、現地史跡「駒立岩」は整然と並べられた敷石の上存在する。もとからここに存在していて、沈下を避けるためだけに敷石が敷かれたのではない。これほどの大きな岩がもともとここに存在したのなら、その周辺もそれなりの地質(岩質)でなければならぬが、ここはかつての海の中で基本的には砂地である。当地は石の名産地だが、この近辺に採石場があるわけでもない。敷石の件を合わせて考えると、自然そのままではなく整備する意図をもって史跡化されたようである。このようなことから、「駒立岩」は、よそから持って来られた岩だとみて間違いない。もちろん大前提として、「八丁石」(國學院本)が「馬立石」(伊能図)「駒立石」(県図本・洲崎寺本)と呼ばれていたという前項までの成果を忘れてはならない。<sup>(10)</sup>

これらの根拠から、現地史跡「祈り岩」「駒立岩」は後世の付会だと考えられる。しかも、「祈り岩」の移動が先行し、「駒立岩」のそれは後から続いたものであるらしい。この項では「祈り岩」移動の先行性を、そして次項では「駒立岩」移動の後次性について述べる。

金毘羅・名勝図会卷三の描く「祈り石」は國學院本の「いのり岩」（洲の先端）と違って、明らかに現在の山寄り県道沿いの「祈り岩」である【図13・19】。とくに金比羅の描く地勢は正確で、五剣山側から現存史跡「祈り岩」に下ってくる坂が描かれていて、それと「祈り岩」の位置関係も現在のそれと同じである。さらに金毘羅では、箕輪野鹿の石碑もそれぞれに添えられていて、もとは与一公園の北端に存在したはずのこの石碑が、幕末のこの時期に現在地に移されていたのだということがわかる。

金比羅は一八四七年の成立だが、「祈り岩」の現在地への移動はもう少しさかのぼれそうである。『全讃志』巻十二の「祈り石」は「洲崎寺の北の浜、<sup>二</sup>あり」とし、「駒立石」は「祈り石の北の海中、<sup>二</sup>有（り）」とする。「祈り石」と「駒立石」の関係を説明したものが、ここで注目すべきは「浜」の表現である。これが与一公園北端の小丘の位置であったとしたら——たとえ現状の盛土をはがしてイメージしてみたとしても——國學院本が描くような微高地を「浜」とは表現しないのではないか。山寄り県道沿いの現地史跡「祈り岩」が海沿いであったことは他の地誌にも見え、地元の人々が里から出て海に向かった時に初めて海と接する砂地を「浜」と呼ぶのではないだろうか。『全讃志』は文政一一年（一八二八）の成立であるので、右の推測が正しいとすれば、「祈り岩」が現地史跡になったのはそれ以前ということになる。伊能図は「祈り岩」を描いていないので判然としないが、かりに県図本・洲崎寺本と同じように（南北）で「祈り岩」「馬立石」を捉えていたとすれば、伊能図の頃まではまだ「祈り岩」は与一公園北端のそれを指していたことになる。ということは、「祈り岩」の移動は伊能図の一八〇八年以降、『全讃志』の一八二八年の間に絞り

うる。

この推測は、大きな問題に発展する。第五節第2項で述べたように、現地史跡「総門跡」「射落島」は西から東へ、つまり海側から山側へ五〇メートルほど移設させられたらしいのだが、その時期については不明であった。右の推測が正しければ、海岸線認識の変容に伴う史跡再整備が行われたのは、一八〇八〜二八年の間ということになる。そもそも、海岸線認識の変容は塩田開発でもなければ起こりえないことである。牟礼の海岸の塩田開発は一八世紀後半（一七六〇〜九〇年代）に進んだと推定される（第二節）。一八〇八〜二八年ごろと言えばそれから一、二世代ほど下るわけでもおもに市道や、山寄り県道沿いに住んでいたと考えられる当地の人々からすると、今でこそ海岸線は塩田の先になっっているが、昔はこの先にあったとの認識が芽生えていたのではないだろうか。塩田開発に伴うそのような風景の変化を想定してみても、「祈り岩」「総門跡」「射落島」が現在地に移されたのを一八〇八〜二八年ごろと推測するのは、穏当な考えかただろう。

## 6 文化・文政期の史跡再整備事業

海岸線認識の変容に伴って「祈り岩」「総門跡」「射落島」の再整備を行ったのが一八〇八〜二八年ごろだとすれば、ちようど文化・文政期（化政文化の時代）にあたる。とくに、十返舎一九『東海道中膝栗毛』の存在は注目される。正編は東海道の旅物語であるが、続編は宮島、木曾、善光寺など諸方面に脚を延ばしている。その中に『金比羅参詣続膝栗毛 初編 上下』（文化七年（一八一〇））がある。大坂道頓堀を出船し、播磨の舞子浜、淡路島を眺めつつ、播磨の室、小豆島、丸亀を経て金比羅権現に至る弥次・喜多の物語である。当地牟礼・屋島を経由したものではないが、空前の旅行ブームが屋島合戦の地にまで押し寄せてきたことが容易に察せられる。そのことは、それまでの史跡が

「観光名所」へと変貌したことを意味する。ましてや塩田開発によって与一公園北端の「いのり岩」(國學院本)が「史跡」としての立場を喪失しつつあった当地においては、街道沿いに、新たな「祈り岩」を再整備することが望まれたのではないか。「金毘羅参詣名所図会」が弘化四年(一八四七)、『讃岐国名勝図会」が嘉永七年(一八五四)にそれぞれ成立している事実も、まさにそのような名所案内・旅行記のニーズが高まったことを表している。

そしてこの時期に再整備された「山寄り県道」沿いの「祈り岩」から「八丁石」が「駒立石」として眺められていたとすると、(北西)方向の「内裏屋敷」(安徳天皇社)が意識されたものだったと考えられる。現地史跡「祈り岩」が現状の姿になった一八二〇年ごろ以降、久通浜塩田や宮北川が成立する明治四年(一八七二)までの約半世紀は、「八丁石」から北ないしは北西に広がる海を望みえたはずである。

## 7 「駒立石」移動の後次性

次に、「駒立石」の移動の時期について考える。ここまで名勝図会と称してきたのは、第三卷「八栗屋島源平古戦場」図なのだが、じつは同書第四巻にも当地を描いた図がある。無題で、画面の右上に「檀之浦／皇居跡／次信碑／菊王丸墓／洲崎寺／駒立石／祈石」とある【**図14**】。この項ではそれぞれを第三巻図・第四巻図と呼ぶことにして、これらに金毘羅を加えて、三枚合わせて検討したい。三枚ともそれぞれにデフォルメが著しく、方位や位置関係の把握がはなはだしく異なるので、解釈には注意が必要である。

第四巻図の「祈石」は与一公園北端とも現地史跡とも解しうるのだが、先述のように第三巻図や金毘羅によって現地史跡「祈り岩」と同じものであると考えてよい。そうした場合、その「祈り岩」を起点として見た「駒立石」は「八丁石」なのか宮北川の川中の現地史跡なのか、第三巻図でも第四巻図でも判別しにくい。この窮地を救うのが金毘羅

である。金毘羅によれば、この時期（幕末）の「駒立石」は明らかに「八丁石」（伊能図の「馬立石」）である。「塩ハマ」（塩浜）との位置関係からみても、そこに描かれた「駒立石」は「八丁石」と同じものである。金毘羅にも北岸と洲のツノの間のV字（伊能図では小さなクランク）を大きく食い込ませるデフォルメはみられるが、これは対岸の談古嶺から見下ろした図だと考えれば解決する。少なくとも、金毘羅の「駒立石」が現地史跡「駒立岩」だとはい底考えられない。しかも、金毘羅の描く「駒立石」は一枚岩ではなく中程度の石の集合体であり、國學院本の「八丁石」に酷似している。金毘羅は三図の中でもとりわけ写實的に描写されているとみてよさそうである。結果として、第三巻図の「駒立石」が現存史跡のそれに近似していたり、「祈石」が垂直方向に長い石であるように描かれていたりするのは、著しいデフォルメによるものであると結論づけよう。

ついでながら、金毘羅には現在の与一公園に相当するらしき、北向きの岬状の地形がみえる。これはまた、國學院本に描かれた洲が盛り土されて高さを増し、塩田と集落（牟礼浄化苑と山寄り県道沿いの集落）との間にそれが位置しているとするこれまでの推察を補強するものである。

このように、「駒立石」「駒立岩」については金毘羅・名勝図会のところまでは國學院本の「八丁石」（伊能図の「馬立石」）と同じものであったと推断することができる。そして、結果的に、その中間に位置する県図本・洲崎寺本の「駒立石」も同じものを指していると考えてよいことになる。県図本・洲崎寺本の「祈石」はおそらく國學院本の「いのり岩」と同じもので、実際には〈南東―北西〉の方向にあるはずの「駒立石」（「八丁石」）との関係を大雑把に南北と認識して描いてしまったということになる。

以上の検討から、名勝図会の刊行された一八五四年当時はまだ、塩田開発の北進が「八丁石」に接するほどは進んでいなかったことがわかる。

「駒立岩」と「祈り岩」は同時に現在地に移設されたのではなく、「祈り岩」が先に移され、「駒立岩」は「八丁石」のままであった時期があったということである。その過渡的な状況を伝えるのが、金毘羅・名勝図会である。おそらく一八二〇〇七〇年ごろの半世紀ほどは、現地史跡「祈り岩」から約三〇〇メートル先の「八丁石」を見て「駒立石」と呼んでいたのだろう。

箕輪石碑の位置を軸に据えてここまでを整理すると、一六七〇年前後の時期に設置されたのは箕輪石碑「いのり岩」が与一公園の北端、箕輪石碑「こま立石」が八丁石のそばであった（第一段階）。次に、海岸線認識の変容によって、一八〇八〜二八年（伊能図〈全讀志〉に「いのり岩」が現在地（山寄り県道沿い）に移された（第二段階）。それは、総門跡・射落島の移設とほぼ同時に行われた一大事業であった。「八丁石」ではない新たな「駒立岩」が現在地に設置されたのは、名勝図会の一八五四年以降、宮北川成立の一八七一年以前のことと考えられる（第三段階）。

## 8 宮北川の成立とそれ以前の北岸北進

一八五四年の名勝図会までは、牟礼浄化苑の地はまだ「八丁石」に接するほど埋め立てられていなかった（先述）。宮北川より北の、牟礼久通り西団地中公園、牟礼久通り西団地北公園、丸一石材工業までの一帯を、かつては久通浜塩田と称した（現在の「久通」はヒサドオリ）。日本たばこ産業高松塩業センター（一九九一）所載の「塩田築造年代表」によれば、久通浜塩田の開発は明治三年（一八七〇）に着工され、同五年に完成したとのことである。ゆえに、宮北川の成立もその頃と推定される。日本専売公社四国支社編（一九七三）によれば、これを行ったのは中通仁太郎だといふ。大日本帝国陸地測量部『屋島 二万分一地形図志度及高松近傍6号』（製版は明治三三年（一八九九）だが測量は明治三九年（一八九六））にはすでに久通浜塩田が描かれている。

ここで、忘れてはならないことがある。第六節第2項で、現地史跡「駒立岩」から西北西に延びる宮北川の方向が不自然であることを指摘した。通常ならばこの類の人工的な水路は最短経路で海や本流に流すことが多いのに、宮北川は西北西方向に向いているのである。この不自然な水路の向きから、「八丁石」⇨「馬立石」を目標して南側から陸地が伸びた時期があったことを推定した。伊能図から推測しうる当時の北進ラインは与一公園と与一北公園の間の道路だと考えられ、その道路が二段階で埋め立てられた痕跡だと考えた。ということは、そのラインよりも北側の一帯（もくもく遊らんどといある・げんべい観光案内所、岡田建設、与一北公園、牟礼浄化苑の北半分）が「八丁石」⇨「馬立石」の手前まで埋め立てられた時期があり、そのために西北西向きの水路が生じたと推定したのである。

逆の場合を想定するとわかりやすいが、久通浜塩田の開発が始まる一八七〇年まで北進ラインが伊能図のまま動いていなかったのなら、「八丁石」の北側ではなく南側に水路（宮北川）を通すこともありえたはずであるし、そのほうが一般的な考えかたである。現状がそうならないのは、伊能図に描かれた北岸が「八丁石」を目標しつつ埋め立てられていった段階があることを示している。先に、伊能図の北岸は金毘羅や名勝図会のところまで変わらなかったと推定したので、一八五四〜七一年の一八八年間のことに絞られるが、その時期に北岸が「八丁石」に接するまで埋め立てられた段階があったと考えることになる（現地史跡「駒立岩」が設置されたのはこの直後であったかもしれない。次項）。

さて、宮北川が成立したことによって、現在のように「的場」（平家方の女房が扇の付いた竿を持って立つ絵看板）が設置されるに至る。明治三一年（一八九八）の『屋島名勝手引草』は、「柝石」については「海浜にあり」とするのに対して「駒立石」を「塩田の中にあり」と表現する。しばらくは陸上の塩田に置かれた「駒立石」だったのだろう。昭和二九年、昭和三九年の写真を見ても、宮北川の上流が現在ほどには開かれていないように見える（不明瞭だが）。現在のように川幅が広げられ、「駒立岩」を守るかのように護岸が湾曲させられ、敷石が敷かれ、水上に「駒立岩」が置

かれるようになったのは、昭和以降のことかもしれない。

## 9 「祈り岩」「駒立岩」の新設

以上のように推定すると、大きな問題が生じる。この項では、史跡そのものの岩を「史跡岩」と呼び、箕輪石碑のように史跡の所在を示す石を「名札石」と呼ぶ。

箕輪の名札石「いのり岩」が一公園の北端から現在の山寄り県道沿いに移されたとなると、現在みられる史跡岩「祈り岩」は、どこからか新たに持って来られた岩だということになる。ただ、当地には同様の岩がいくらでもあるので、長辺一・八メートル程度の「祈り岩」を近傍からここに移すことは、さほど難しいことではない。問題は、史跡岩「駒立岩」のほうである。楕円形で、長辺が約四メートル、短辺が約二・三メートルもある巨岩は当地でも珍しい部類に入るので、「祈り岩」と同列には考えられない。

論者が疑っているのは、國學院本の「いをち」に描かれた岩が、現地史跡「総門跡」にも、「射落島」にも見当たらないことである。現在それらの現地史跡にあるのは近代的な美的感覚の岩ばかりであるし、國學院本の絵師が「史跡」と認識して描いたような岩は見当たらない。しかも、國學院本の「いをち」に描かれた楕円形の岩と現地史跡「駒立岩」の縦横比は近似している。さらに、國學院本の描くその岩は左上にへこみがあるのだが、現地の史跡岩「駒立岩」も「石に馬の足跡あり」（金毘羅）とされるくぼみがある【**図15上段右**】。穿ちすぎであるようにも思うが、國學院本が明らかに「史跡」の意識をもって描いたらしき岩が現在地には存在せず、それに類似した岩が宮北川の川中に存在していることは指摘しておきたい。これほどの巨岩の運搬は不可能だと思われるかもしれないが、どちらも水辺であり、コロと筏を使えば当地の石工の技術の高さからすると、さほど難しいことではなかっただろう。

史跡岩がそう簡単に移動・移設されるのか——そういう疑問も湧き起こらないではないが、けっして簡単に移動させたわけではなく、風化しつつあった那須与一伝承を現状に合うかたちで復活させる、決死の思いがあったとみるべきだろう。それほどに、塩田開発に伴う地形の変容は幕末の当地の人々に危機感を抱かせたものと推し量ったほうがよい。

これと事情は異なるが、もう一つ史跡岩の移動の疑われる事例がある。与一公園北端の小丘の上にあったはずの「いのり岩」(國學院本)がそこに存在しないのである。代わりに、高さ五メートル以上もある石のモニュメントが設置されている【**図16上段**】。そこにあつたのが「いのり岩」であることが忘れ去られていて、このモニュメントが設置される時によそへ移されてしまったのではないだろうか。ふつう、そのような場合、多大な労力を使って遠くに運搬されるとは考えにくく、モニュメント設置の邪魔にならない程度のところに移されるものだろう。

これについても、論者が疑っている岩がある。与一北公園の入り口から入ってすぐ右にある岩である【**図15下段右**】。地上から出ている部分の高さ一・二メートル、上から見ると一・五メートル×〇・七メートルの長方形、横から見ると三角錐の岩である。國學院本の「いのり岩」は四く五個の岩の集まりであるように見えるが、その中の一つがこれなのではないか。史跡だとの認識がなければモニュメント設置にあたってそこに存在した岩がドリルで破碎されることもありうるわけで、その際に一つだけ残った見栄えのする岩が与一北公園に移された可能性はないだろうか(高松市公園緑地課に問い合わせたところ、モニュメントの設置は一九九一年のことで、その際に岩の移設があつたかどうかについては不明とのこと)。

## 10 いのり岩レプリカ石の成立

那須与一の扇の的ばなし変容の追跡も、最終段階に來た。

当地には「祈り岩」あるいは「祈り岩に類するもの」が二つある。一方が「史跡」で、もう一方がレプリカである。現在では「山寄り県道」沿いの岩（論旨の平明化のためにかりに馬鈴薯岩と呼ぶ）が史跡「祈り岩」であつて、宮北川の法面に食い込んでゐる岩（その形状から筆形岩と呼ぶ）は、そのレプリカであるとされている。小さな石碑が添えられていて「いのり岩レプリカ石」と刻まれている【**図16下段**】。これについて高松市文化財課は、「正確な情報はもっていない」と断つたうえで、「祈り岩周辺が市街地の中に埋もれてそこから駒立岩が見えなくなつてしまつたことから、旧牟礼町が昭和五六・五七年頃（昭和六〇年の源平屋島合戦八百年祭を前に）周辺の道標や標柱を整備した際に、駒立岩近くにレプリカ岩を設置した可能性がある」との推定説明をしている（高松市文化財課）。

ところで、高松市地図情報システム「たかまつぶ」の地図は筆型岩のほうに「祈の岩」と記している（馬鈴薯岩には無表示）。これは、地元牟礼の人々の認識と違ふようである。高松市と牟礼町は平成一八年（二〇〇六）一月に合併したのだが、合併前の旧牟礼町が作成した都市計画図には「祈り岩」の表示はなく、平成二二年（二〇一〇）の都市計画図に初めて筆形岩に「祈の岩」と表示するものが現れ、「たかまつぶ」はそれをそのまま踏襲したものとのことである（高松市都市計画課）。高松市と牟礼町が合併してから九か月後の平成一八年一〇月に、「山寄り県道」沿いの馬鈴薯岩が高松市登録史跡となり、現在も位置の変更はないとのことである（高松市文化財課）。いずれ「たかまつぶ」は修正されるだろうが、平成二二年の都市計画図は公文書として今後に残つてゆくものなので、後世のためにここに記しておく。

ただ、たとえばそれが誤りだとしても、昭和五六・五七年（一九八一〜八二）にレプリカだと承知のうえで筆型岩を新

設した旧牟礼町の人々の思いも、推察しておきたい。宮北川の「駒立岩」周辺でいくつかの設置候補地があったろうが、筆形岩と「駒立岩」を結ぶとほぼ「南北」の線になるのである【図8】。宮北川の水路によって、あるいは「釣場」の設置によって完全に「東西の物語」が定着していたはずだが、『平家』の内容は「南北の物語」であると気づいた旧牟礼町の人々に「東西」から「南北」へと矯正する思いが生じたのかもしれない。

なお、現在の法面は平成二三年に改修されたもので、その際に現状のように筆形岩が法面に食い込む芸術的なかたちになり、沈下を防ぐための敷石に乘せられたようである。

## 11 本節のまとめ

那須与一の動線、および二つの岩の変容という観点から以上を総合すると、次のようになる。

第一段階……与一公園北端の小丘から与一が「北」に向けて鎗矢を射た認識であった。(國學院本。一六四二年)

第二段階……「八丁石」を「駒立石」と呼んで与一公園北端の「いのり岩」との間に与一の動線を発生させた。

与一の動線が「北」(沖)向きから「北西」(対岸)向きに変化した時期であったかもしれない。(箕輪石碑、泉図本・伊能図。一六七〇年ころ)

伊能図。一六七〇年ころ)

第三段階……塩田開発に伴って海岸線認識が変容し、「祈り岩」を山寄り県道沿いの現在地に設置し、箕輪

石碑も与一公園の北端からそこに移設した。与一の動線は「祈り岩」から「八丁石」に向かうことになり、ま

すます「西」向きの傾向が強くなった。(伊能図、全讃志。一八〇八～二八年)

第四段階……与一北公園・岡田建設・牟礼浄化苑の北半分が「八丁石」に接するところまで埋め立てられ、結果的にその北岸がのちの宮北川の左岸になった。この直後に現地史跡「駒立岩」が設置された。与一の動線は「北

西」向き。(名勝図会、宮北川成立以前。一八五四～七一年)

第五段階……明治四年（一八七二）に宮北川が成立して水路がほぼ〈東西〉方向になり、ポンプ場に「的場」の絵看板も設置されて、与一が〈西〉に向けて射たかのような認識に変容した。（昭和期）

大きく言えば〈南北の物語〉が〈東西の物語〉になったと言えるわけだが、その内実においては「祈り岩」も「駒立岩」も江戸初期とは異なるものになったのであり、その背景に、江戸初中期の出版文化の盛行、塩田開発に伴う海岸線認識の変容、江戸後期の旅行ブームの到来があったのである。表面的な現象を見れば、変わってしまったということになるが、その深層を窺うと社会状況や地形の変化などに採まれながらむしろ、与一がここで扇的を射た物語を守りぬいた、というべきなのだろう。

## 七 扇的ばなしのもう一つの変容理由

那須与一の扇的ばなしが〈南北の物語〉から〈東西の物語〉へと変容した理由は、塩田開発に伴う干拓だけが重要なのではない。もともと義経勢は引田、丹生屋、白鳥（ここまで、東かがわ市内）を経て志度寺方面から屋島に接近している。一方、平家は安徳天皇社の位置に屋島内裏を構えていた（との現地伝承である）。國學院本以降、現在の安徳天皇社の位置に「内裏屋敷」（安徳天皇行在所）を記す古地図・絵図がほとんどである。屋島側に平家が、牟礼側（八栗側）に源氏がそれぞれ陣取ったものとして絵画的な構図をイメージすれば、たしかに〈東西の物語〉になる。

一七世紀前半製作のケルン東洋美術館蔵『一の谷・屋島合戦図屏風』（画像掲載は割愛）や名勝図会所載「義経弓流の図」の平家方の船の背後（画面左端）に、明らかに屋島側の陸地が描かれており、那須与一と平家が〈東西〉の構図で捉えられていることがわかる。名勝図会所載「義経弓流の図」の下部には義経の弓流しや景清の鏝引きが描かれ

ていて、それらは〈東西の物語〉として違和感がないことから、「扇的」の構図はそれらに引きずられたようだ。ほかに、『屋島壇ノ浦合戦図』（洲崎寺蔵）、『屋島壇之浦源平合戦之図』（大正七年（一九一八）、大正九年版など何度か増刷されている）、昭和戦前の絵葉書（ネットオークションに頻出）も、「扇的」を〈東西の物語〉としている【図17】。

江戸期（明治期の絵図が〈東西〉の構図で扇的のばなしを描くのは、『盛衰記』の影響である可能性がある。『盛衰記』でも那須与一の立ち位置から「弓手の沖」「馬手の沖」（左側・右側）を見てどちらも平家の人々が船に乗っているし、彼の背後には（後ろの陸を顧みれば）源氏の武将たちが控えているので、基本が〈南北の物語〉であることは変わらない。ただし『盛衰記』では、ここで吹いてくる風を「西風」と表現している（寛一本では北風）。それを与一に降りかかる災難として向かい風と解釈し直せば、与一の立ち位置はたしかに東岸（牟礼側）ということになる。それに、「源氏は武例・高松に陣を取り、平家は屋島、焼け内裏に陣を取る。源平の両陣、三十余町を隔てたり」との表現もあり、〈東西〉の構図になっているように見える。「三十余町」は三キロメートル強であり、伝承地ではあるが牟礼町の瓜生が丘源氏本陣跡から安徳天皇社までは、そのくらいの距離である（これだと平家は海上から安徳天皇社付近の陸地へと勢力を押し戻したことになる）。

このようなことから、『盛衰記』は屋島合戦の全体構図を〈西の平家〉〈東の源氏〉という東西の構図で捉え、その中に本来〈南北〉の認識で語られていた扇的のばなしを強引に入れ込んだもののように見える。つまり、屋島合戦の現地史跡が混乱している根本的な要因は、『盛衰記』の世界（空間認識）自体が重層化していることによる。現地の側に認識不足があったというわけではないということだ。『盛衰記』にみえる四種類の空間認識を整理したかたちで示すと、次のようになる。

（一）「那須与一」は〈南北〉の空間認識（沖の平家と陸の源氏）

(2) 「嗣信最期」は内裏屋敷(安徳天皇社)周辺に接写した東西の空間認識(船の平家と陸の源氏)

(3) 屋島合戦の全体を俯瞰した時だけに現れる牟礼・高松の源氏と屋島の平家という(東西)の空間認識

(4) 源氏勢(義経勢)が押し寄せてくる前には、平宗盛が牟礼側、安徳天皇や女性たちが屋島側にいたとする、

平家一門を(東西)に振り分ける空間認識

依拠した物語自体が重層化しているのだから、現地の史跡が混乱するのも無理はない。小さな説話単位の逸話(那須与一)や「嗣信最期」が先に成立し、それらを含み込んで『盛衰記』が成立したために、空間認識の重層化という事態が物語内で出来してしまったのである。

以上のように、(南北の物語)から(東西の物語)への変容理由や時期を推測したうえで、あらためて國學院本を眺め直してみる。國學院本の「いのり岩」は北に伸びる洲の先端に位置するものの、その地域自体が牟礼側の岸に位置している。つまり、那須与一がどの方向に向かって矢を射たかという微視的な見方からすると(南北の物語)であるように見えるが、巨視的にみてこの入り江(檀の浦)の東岸に位置しているのだ。正確に言えば、國學院本は(東西の物語)の内側に(南北の物語)を内包していることになる。そんなことが可能だったのは、(東岸(牟礼側))にありながら北向きに伸びる洲<sup>ウヅ</sup>が存在したからにはかななるまい。入浜式塩田のための干拓で南北方向の洲が消滅したことが、現地における与一の物語の変質に決定的な影響を与えたということである。唯一の救いは、その洲が今なお北に伸びる微高地(与一公園)として確認できることである。

## 八 二か所の次信墓つぎのふばかの比重の変化

以上で那須与一関係史跡についての分析を終え、本節以降は佐藤次信関係史跡について考察する。

### 1 屋島から牟礼へ

一般には、佐藤次信の墓は屋島東町（安徳天皇社の西北西）と牟礼町（琴電八栗駅の南）の二か所あると考えられている。牟礼墓は画像でも確認できるように「佐藤次信墓」と書かれていて、わかりやすい【**図18四段目右**】。石碑の裏に「寛永癸未仲夏上浣建之」とある。一方、屋島墓は松平頼重の命によって儒臣岡部拙斎が撰進したもので、二〇〇字超の文字が小さく書かれている。「維歲壬午之夏…」から書き始められ、末尾は「寛永癸未仲夏上浣涉笔於高松之城下」で結ぶ（以下、この碑を「いさいじんご維歲壬午」碑と呼ぶ）。現地の碑は摩滅もあって判読しにくいのが、幸いこの翻刻が『牟礼町史』旧版（六一〇頁）、松原秀明編『日本名所風俗図会14四国の巻』所収「金毘羅参詣名所図会」「讃岐国名勝図会」、『香川県史』明治四二年版などに掲載されている。これによると、高松入部早々の松平頼重がここを訪れたことがきっかけで、この碑を建てることになったとある【**図18二段目**】。

『新修高松市史』の屋島墓の項では「安徳天皇社の北にある継信墓は、初代高松藩主松平頼重が、この地をたずね、継信忠死の事蹟を、世人に知らせるため」に建てたものという説明をしている（二八二頁）。『牟礼町史』旧版も、「頼重は…（中略）…佐藤嗣信の碑を檀の浦の上、へんろ道の間北側に、墓碑を王墓にそれぞれ建てて、一般の人にその忠誠を知らしめた」（二五〇頁）、「ここは四国八十八か所の巡拝の通路であったので、寛永二十年五月上旬、松平頼重侯が次信の忠死を広く世に知らせるためにこの地にわざわざ建てたものである」とある（六〇九頁）。屋島墓の立地

自体に固有の深い意味がないという物言いである。『牟礼町史』新版（八六頁）の地図でも、牟礼墓を「継信墓」、屋島墓を「継信碑」と記している。これらの影響を受けて、屋島墓を次信の供養塔であるとか、顕彰碑であると記す旅案内が多い。一方の牟礼墓は「佐藤次信墓」の名称にふさわしい認識がなされているといつてよい（そもそも、これらの四角柱の石碑は墓石と呼ぶべきではなく、墓石本体の所在を示す案内碑）。現在は牟礼墓のほうが墓地公園化され、明治二二年、昭和六年の顕彰碑などもあって大々的で、一方の屋島墓のほうはひっそりとしているように見える。

ところが、國學院本の提供する情報は、現在伝えられているそのような認識を覆す。國學院本の屋島墓の位置に「次信石塔」の文字だけでなく五輪塔も描かれているのである。<sup>(13)</sup> 國學院本に次ぐ古さを（部分的に）留めていると推測される県図本や洲崎寺本でも、國學院本と同じ屋島墓の位置に「次信ノハカ」「次信墓」とあって、両図とも牟礼墓の位置には何も書いていない【図18一段目】。決定的なのは、『天保国絵図』の屋島墓の位置に四角柱の石碑が描かれていることである【図18二段目右】。「維歳壬午」碑であるとみられる。同じ一六四三年に牟礼墓も建立されたはずであるのに、同図にはそれが描かれていない。現代のわれわれからすると「墓」のほうが重いものでありそうだが、江戸中期までの人々にとっては、そうでもなかったということである。

さらに、基本を思い起こせば、屋島墓周辺に「次信」の小字が今も残っていることは、無視しがたい。かりに近代に入つてここに「次信」の小字を付けるくらいなら、次信の墓がもう少し大きなものであったり、大々的に整備されたりするはずだからである。ゆえに、「次信」の小字は、江戸期から続く地名だと考えられる。五輪塔の図、複数の古地図の表記、現地の小字——この三点の根拠から、近世中期までは屋島墓のほう次信墓として伝承されていた可能性が高い。

さて、屋島墓は『盛衰記』の内容によって設置されたものだろう。これを読み解く際のキーワードは、「焼け内裏」

と「柴築地」である。

平教経の猛攻を受けて窮した源義経が状況を打開するため、平家の拠点である内裏と沖合の船との連携を遮断するために、その中間にある「屋島の在家」（民間の家屋）に火を掛けた。その時、不幸にして西風（東風の誤りか）が激しく、焼くつもりもなかった内裏まで延焼してしまった。

能登守教経は、打物取つても鬼神のごとく、弓矢を取つても精兵の手利きなりければ、源氏の兵多くこの人にぞ討たれる。判官、下知しけるは、「平家は大勢なり。御方の勢はいまだ続かず。敵、内裏に引き籠もりて、出で合ひ出で合ひ戦はんには、ゆゆしき大事。そのうへ、兵船、海上に数を知らず。屋島の在家を焼き払ひて、一方に付きて攻むべし」と云ひければ、条里を立てて造り並べたる在家、一千五百余家ありけるに、軍兵、家々に火を放つ。折節、西風激しく吹き、猛火、内裏に覆ひ、一時が間に焼け滅びぬ。

これ以降、この内裏は次のように「焼け内裏」と表現される。

- ・（大胡小橋太は）焼け内裏の柴築地の陰より、裸になりて犢鼻褌を搔き、刀二つち持ちて海へ入る。
- ・源氏は武例・高松に陣を取り、平家は屋島、焼け内裏に陣を取る。
- ・（義経は）七十余騎にて、焼け内裏の前、平家の陣へ押し寄せて関の声を発す。

右の最初の引用文に「柴築地」があるが、『盛衰記』ではこれが源平の攻防ラインとして設定されている（原表記は「芝築地」だが意味からすれば「柴築地」。「柴垣」だと背丈が低いので、より大きなものを読者に想起させるために「柴築地」としたのでらう。

- ・（平家方の七将以下三十数人が）船を漕ぎ寄せ陸に上がり、柴築地を前にあて後にあて、進退、極まつたり。
- ・（源氏が押し返すと）平家は徒歩立にて、柴築地よりうち出でて、引き詰め引き詰め馬の上を射る。

・能登守、また二十騎ばかり、船より下り、柴築地を木陰として、引き取り差し詰め散々に射ければ、

船と「焼け内裏」の中間に「柴築地」があり、そこが源平の攻防ラインになっていると読み取ることができる。このように、『盛衰記』は一貫して「焼け内裏」とその東の海岸線を含むあたりを物語の舞台としている。そして、「焼け内裏」は現地史跡「内裏屋敷」（安徳天皇社）に比定されている。平教経が攻め込んでくる場面があるので海岸線（現地でいえば県道一五〇号線）から西へ入ったところが攻防ラインである。安徳天皇社のすぐ北に國學院本の描く遍路道があり、次信が教経に射られた場所がこのあたりであろうとイメージしてみる。すると、負傷した兄継信を弟忠信が肩に掛けて義経のいた後陣まで退き、そこで継信が義経の膝に抱かれるようにして息を引き取ったとすると、ちょうど屋島墓の位置になる。このように、内裏、海岸線の関係から規定される南北の攻防ラインに、東から西へと動く人物の流れを当てはめてみると、「維歲壬午」碑はとても整合的な場所に建てられていることがわかる（だからといって、これを史実だと言っているわけではない。物語世界を現地に当てはめたというべき）<sup>14</sup>。

次信の忠心に感じ入った義経がその死を惜しむこの場面は、屋島合戦譚の中でも白眉と云うべきところであり、だからこそ國學院本（次信石塔）のみならず江戸期の他の古地図も屋島墓の位置に「次信ノハカ」「次信墓」などと記し続けたのだろう（牟礼には何も書かないのに）。

屋島墓は次信最期の地であるのに対して、牟礼墓は火葬の地ゆえに「次信やきば」と記されることになったのだし、茶毘に付されたその場所に埋葬したと考えて松平頼重が「墓」と表現したのである。このように屋島墓と牟礼墓との関係を江戸初期においては整合的に一本の文脈のように説明することができる。江戸期の人々にとって屋島墓のほうが重要であったのは、最終的な埋葬地よりも、平教経の矢面に立って義経を守った地<sup>15</sup>という物語を付随させた土地のほうが意義深いものであったからだろう。要するに、江戸期の識字層は『盛衰記』をよく読んでおり、物語のもつ

とも感動的な場面を実際の土地に落とし込んで受け止めようとしたのだろうが、近現代の人は物語を忘れ、ただ「墓」という表記だけに引きずられてしまったのだといえる。佐藤次信は、江戸期には人々の教育材料として使われたのだろうが、近現代ではただ甲われるだけの人になってしまったということでもある。

松平頼重が一六四三年に「佐藤次信墓」碑（牟礼墓）を建立した際は、國學院本に描かれている球体墓（後述）が存在したものと考えられる。しかし、二年後の王墓池（平田池）の新造によってその碑を数十メートルほど移さざるをえなくなり、その移設作業をした際に何らかの理由によって球体墓は破損してしまったと推定しうる。これによって、牟礼墓は「佐藤次信之墓」碑のみが残り、墓石本体のない状況が一時的に（約二年間）現出したと考えられる。そもそも近代人の感覚で、四角柱の石碑に「墓」と書いてあれば、それがそのまま墓石だと誤解するが、これは目印の名札に過ぎない。江戸期の人々は「佐藤次信墓」碑が墓石本体ではなく案内碑に過ぎないものだとわかっていたと考えられ、その穴を埋めるために、「いをち」（現、総門）にあった五輪塔が移されたのではあるまいか（後述第九節第7項）。

## 2 菊王丸の墓

次信墓とセットで考えなければならぬのが、菊王丸の墓である。菊王丸の墓も屋島東町にある。菊王丸は、能登守教経の童である。『平家』や『盛衰記』によると、教経の奮戦場所と次信が討たれた場所と菊王丸が討たれたところはほぼ同じ場所であるはずなのだが、現地の次信墓（屋島墓）と菊王丸の墓は五〇〇メートルほど離れている。菊王丸は平家方の船の中で絶命したのであるから、その墓が陸上にあるのはそもそも不自然である。菊王丸の墓を描くのは幕末の金毘羅・図会あたりが初出であるし、物語も次信の忠死が主題であるので、次信墓と菊王丸の墓の重要度

は同じではない。つまり、次信墓は國學院本にあるように江戸初期には確認できるのに対して、菊丸の墓は江戸後期ごろに、そのあたりにあった古そうな墓石を「菊丸の墓」と呼ぶことにしたのだろう。<sup>15)</sup>

### 3 認識変容のプロセス

先述のように、國學院本だけでなく県図本・洲崎寺本ともに屋島墓にだけ「次信ノハカ」「次信墓」と記している牟礼墓にそのような表記は存在しない。『天保国絵図』でも、屋島墓のみ描いていて、牟礼墓は描いていない。これらのことから、江戸期を通して、屋島墓のほうが次信最期の地として大切にされていたことがわかる。

至徳元年（一三八三）四月五日、奥州の佐藤氏の出身である空信（あるいは信空）という僧が次信の石塔に詣でて、和歌を詠み、そこで一夜を過ごしたという記録が『屋島寺旧記』にあり、『翁嫗夜話』巻四や『牟礼町史』旧版（六一〇頁）はこれが牟礼墓のことであるかのように述べているが、江戸期の複数の古地図の扱いからみて、空信が通夜したのは屋島墓のほうだろう。さらに、貞享四年（一六八七）刊の真念『四国遍路道指南』<sup>みちしるゝ</sup>には、「是（屋島寺）よりやくりじまで一里有。寺より東坂十丁下り、ふもとに佐藤次信のはか有」とあるが、これも安徳天皇社の西北西の屋島墓のことである。

ところが、いつの頃からか、牟礼墓のほうが重きをなしてくる。これについて、重要な史料がある。『翁嫗夜話』（延享四年（一七四七）巻四「佐藤次信墓」に、牟礼墓の地中から古い刀が出てきて志度寺に奉納された経緯を記している）『牟礼町史』旧版・新版の紹介する『次信古刀記』（宝暦六年（一七五六）にもこの説は見える）。このような話が出てくるということは、牟礼墓も聖地として格上げされてきたことが窺い知られる。両書の成立時期から見て、牟礼墓の神聖化が始まったのは江戸中期かそれ以前ということになる。やはり、松平頼重が「墓」と称する石碑を建てたことが大きな

きっかけになつたのだろう。しかも同書には「英公（松平頼重）命じて、別に次信墓を壇の浦に立つ。けだし、古戦場に存するにや」（原漢文）とあつて、屋島墓を付随的なものとする認識がすで見える。この延長線上に、幕末の名勝図会がある。これには牟礼の次信墓地公園の位置に「佐藤次信墳」「薄墨墓」が大きな石碑とともに描かれている【図19】。次信墓地公園は明治二二年三月（二八八九）、昭和六年五月（一九三二）に大々的に整備されたので（現地に顕彰碑などがある）、時代が下るほど、牟礼側のほうが重きをなしていったことがわかる。

明治期の版画『牟礼村源平古戰場跡』（洲崎寺蔵）は洲崎寺で製作されたものと考えられるが、これは名勝図会の構図の影響を受けている【図19】。名勝図会に描かれていた屋島側の「次信碑」「菊王丸墓」「内裏跡」を料紙の範囲に収めながらもそれらの史跡名称を割愛している。その結果、この版画によるかぎり、次信墓は牟礼側のものだけになる。版画の名称に「牟礼村」とあるように、牟礼のアイデンティティ確認のために製作されたとすれば、屋島側の史跡を書かないのも当然だろう（後述のように「内裏屋敷」の位置に混乱があるのでその表示を控えたとも考えられる）。

一方の屋島側はすたれたのかというと、そうでもない。その根拠が、屋島側の次信墓、菊王丸墓の載る土台の石組みである。城の石垣に使われる切り込みはぎの技法を使用した重厚な土台である。次信の土台が四段組み、菊王丸のそれが三段組である。ただし、これらの石組みはさほど古くはないので、明治期ごろのものともみられる（現地の石組みは昭和以降の積み直しや補修の痕跡が見えるものの、昭和戦前の絵葉書にこの二か所の石組みは写っている）。『天保国絵図』（一八三八）に「維歳壬午」碑のみが描かれていて石組みがないことも、その根拠となろう（五輪塔がこれに描かれていないのは、松平頼重の建立した碑のほうが重くなつたためか。近代的な墓石観に近づいたということである）。牟礼の次信墓地公園にはこのように石組みを高く積み積む発想はみられないので、屋島側・牟礼側それぞれに次信顕彰のプロジェクトが推進されたのだろう。明治期は忠君愛國の教育が強く推進された時期でもあるので、主君のために命をなげうつ佐藤次信のような存

在は、都合がよかつたものとみられる。

ここまでを整理すると、牟礼側が勢いを増して屋島側が勢いを失つたという綱引き的な経緯があつたわけではなく、江戸後期～明治期は双方ともに競い合うように次信墓が整備されたものと考えられる。ただ、屋島寺への廻路道として南から登る「加持水」「不食梨」「暈石」のルート（渦元ルート）の整備されたさまが幕末の名勝図会に描かれていることから、人の流れとしては江戸後期にはこれが主流になつたようだ。そして、昭和四年（一九二九）のケーブルカー開通によつて、それと並行の同ルート（歩行者専用だが県道）がさらに整備されたのではないだろうか（最終便に乗り遅れた人が徒歩で下山しなければならないなど）。このような人の流れの変化によつて、安徳天皇社と屋島墓の間の廻路道を通る人は漸減したと推察される。佐藤信古が牟礼の次信墓地公園を整備したのが昭和六年であるから、自動車の普及とともに大きな街道に面した牟礼墓のほうが目玉を浴びる存在になつたともみられる。次信墓地公園の前の道は、かつての国道だったのである【図20】。

二つの次信墓は、次のような変容の過程を経たものと整理することができる。

- (1) 江戸初期までは、屋島墓のほうに格別に重い存在であり、牟礼墓は松平頼重が一六四三年に整備するまでは寂しい場所であつた。
- (2) 松平頼重の整備以降、屋島東町も牟礼町も、それぞれに次信の史跡の整備拡充が図られたと考えられ、競い合うような状況は明治期まで続いたと考えられる。
- (3) 江戸後期の渦元ルートの整備に加えて、昭和四年のケーブルカーの開通により廻路道の利用頻度に偏りが生じ、屋島墓を訪れる人が少なくなり、一方で牟礼墓は佐藤信古による整備拡充もあつて両者の姿に差がつくようになった。

(4) 松平頼重が「墓」と明示した牟礼墓を建立したのが独り歩きして重く受け止められるようになり、相対的に屋島墓は「墓ではないもの」と認識され、供養塔・顕彰碑の扱いを受けるようになった。以上が、二つの次信墓問題の全容である。『平家』や『盛衰記』がきちんと読まれたいままの考証が進み、一方で「射落島」の次信討死伝承も発生して、ますます牟礼側のイメージが盤石になったと考えられる。

## 九 國學院本、『源平盛衰記』等から窺えること

現地史跡の複雑化は、那須与一関係や佐藤次信関係に留まるものではない。それらの謎の多くは、國學院本と『盛衰記』を合わせ見ることよって解決する。基本的なことだが、**名勝図会が参照しているのは『平家物語』ではなく『源平盛衰記』である。**随所に『盛衰記』の引用は見られるものの、『平家』はまったく見ない。名勝図会がそれ以降の当地の史跡整備に大きな影響を与えていることを考えると、その依拠資料が『盛衰記』であることに留意しておく必要がある。

### 1 鎌田光政伝承の後次性

牟礼町の次信墓地公園内に、昭和六年(一九三二)五月、佐藤信古(山形県東田川郡余目町(現、庄内町)、次信から三十世の末裔、貴族院議員、衆議院議員)が建立した「鎌田兵衛尉うたがわがつか疑塚」碑がある。鎌田光政なる人物は、どの『平家』諸本にも登場しないし、『吾妻鏡』など諸記録にもその名は見えない。『盛衰記』にしか登場しない人物である。佐藤次信の功績を顕彰するために私財を投じて墓地公園を整備した佐藤信古が、なぜ鎌田光政の碑まで建立しなければならな

かったのか、その理由は『盛衰記』によって判明する。

『盛衰記』巻四二「源平侍共の軍 附継信盛政孝養の事」によれば、鎌田兵衛尉は光政と言ひ、義経の四天王の一人である。盛政・光政兄弟のうち、兄の盛政は一の谷で討ち死にした。この二人に加えて、佐藤次信・忠信兄弟も義経の忠臣である。この四人が義経の四天王と称されたという。

判官には多くの郎等の中に四天王とて、殊に身近く憑み給へる者は四人あり。鎌田兵衛政清が子に、鎌田藤太盛政、同藤次光政と、佐藤三郎兵衛継信、弟に四郎兵衛忠信なり。

『盛衰記』ではない、一般の『平家』ではここに登場するのは佐藤次信だけであり、義経が次信の供養のために大黒という馬を布施として僧に与える有名な話がある（次項）。ところが、『盛衰記』では、鎌田光政・佐藤次信の二人の供養のための馬なのである。ゆえに、切っても切り離すことのできないセットの意識で読まれたものであり、次信の末裔の佐藤信古が牟礼を訪れて鎌田光政の墓探しまでした（後述第5項）のは、『盛衰記』の影響によると言える。しかし、光政は『盛衰記』にしか登場しない、伝奇的な人物である。現地の伝承の複雑化・重層化した現状から薄皮を一枚ずつ剥がす作業のうち、まず向き合ねばならないのは『盛衰記』の影響だというわけである。

次に進む前に、『盛衰記』の鎌田光政ばなしの後次性について指摘しておきたい。先述のように、義経が光政・次信の供養する話はあるのだが、じつは光政の奮戦譚は『盛衰記』にさえ存在しない。もちろん次信については、平教経の矢面に立って主君義経を守った話があるのだが、光政に討ち死にや自害の話が存在しないので、あまりにもアンバランスである。ただ、この供養ばなしより一〇〇〇字程度前の位置に、一か所だけ光政の名が出るところがある。

此にして、常陸国住人鹿島六郎宗綱、行方六郎、鎌田藤次光政を始として、十余人は討たれにけり。

これによると、光政は「常陸国住人」であるように見える。しかし、そうではない。義経四天王を紹介する際に、「鎌

田兵衛政清が子に、鎌田藤太盛政、同藤次光政」とあるように、鎌田政清の子である。政清は源義朝の乳母子であるから、政清の子である光政は京か相模国の生まれでなくてはならない（義朝は京と相模を往復している）。常陸国の出身だということはありえないわけである。ゆえに、右の文脈で「常陸国住人」に係るのは「鹿島六郎宗綱」「行方六郎」までと考えるべきであり、「鎌田藤次郎光政」の七文字は後次的に挿入された字句だといえる。四天王の一人として義経に弔われるべき話が後ろに控えているので、鎌田光政の討ち死にの記述が必要になって補入されたと考えられる。そしてまた、『平家』諸本を見渡してみても、義経による供養ばなしは本来、佐藤次信だけのために「常陸国住人」えられるので、『盛衰記』の次信供養ばなしに強引に鎌田兄弟の名を入れ、それとの整合性を保つために「常陸国住人」の後ろにその名を加えたのだと考えられる。

この強引な割り込みかたは、外部からバイアスが加わったためと考えられる。鎌田光政の子孫は薩摩に下り、『盛衰記』成立の戦国期には島津氏の家臣であった。そういうところからのバイアスによって、鎌田兄弟がここに割り込んだものと考えられる。戦国期に島津氏が源氏の末裔を僭称し始めており（じつは惟宗氏）、薩摩鎌田氏が鎌田政清の末裔を名乗れば、源氏（島津氏）と鎌田氏の四〇〇年来の深い結びつきをアピールすることになり、薩摩鎌田氏の正当化につながる事ができる。『盛衰記』の鎌田盛政・光政兄弟の名の割り込みかたは、そういう性質の問題である。<sup>16)</sup>そして、『盛衰記』に書かれた以上、一定の権威を持つことになり、つくられた逸話をもとに現地の史跡が整備されてしまうという事態が出来したのである。鎌田盛政・光政兄弟の名は、「鎌田兵衛尉疑塚」碑だけでなく、「佐藤氏念祖碑」にも、

故将鎌田政家が子盛政、光政と並びに奏して兵衛尉と為る。四天王と称す。

と出てくる（政家と政清は同一人物）。『盛衰記』に載ってしまったために、付随的であったはずの鎌田兄弟も、一部の

好事家にとっては無視しがたい存在になってしまったようだ。

## 2 大夫黒・薄墨の名の混在

『平家』諸本では、佐藤次信の供養のために源義経が僧に布施として納めたのは、大夫黒という名の馬であった。だからこそ、牟礼町の墓地公園に松平頼重の作らせた「大夫黒の墓」がある。ゆえに——國學院本には「次信やきば」とだけ描かれていて大夫黒の墓は描かれていないもの——頼重の時代からこれが存在したことは間違いない。

ところが『盛衰記』では大夫黒の名が「薄墨」となっている。

（義経は）一人欠けたることをこそ日頃歎きしに、今日、二人を失ひて、今は軍もせんかたなしとて、継信・光政が死骸を昇きて、当国の武例・高松といふ柴山に帰り給ひて、その辺を相ひ尋ねて僧を請じ、薄墨といふ馬に、金覆輪の鞍置いて申しけるは、「……（中略）……」とて、舎人に引かせて僧の庵室に送られけり。この馬といふは、貞任がをき黒の末とて、黒き馬の少し小さかりけるが、早走の逸物なり。多くの馬の中に、秀衡ことに秘藏なりけれども、「軍には良き馬こそ武士の宝なれば、山をも河をもこれに乗りて敵を攻め給へ」とて、判官、奥州を立ちける時、まゐらせたる馬なり。宇治川をも渡し、一谷をも落とせしこと、この馬なり。一度も不覚なかりければ、吉例と申しけるを、判官、五位尉になりけるに、この馬に乗つたりければ、私には大夫とも呼びけり。片時も身を放たじと思ひ給ひけれども、せめても継信・光政が悲しさに、「中有の路にも乗れかし」とて引かれたり。兵ども、これを見て、「この君のために命を失はんこと、惜からず」とぞ勇みける。

別名を「大夫」としているが、「大夫黒」ではない。薄墨（グレー）と「黒」は矛盾するので、同一化できずに「黒」と表現できなかったのだろう。名勝図会では、牟礼の「佐藤次信墳」の西隣に「薄墨墓」と記している。一方、

覚一本など『盛衰記』を除く『平家』諸本は「大夫黒」である。

黒き馬の太う逞しいに、金覆輪の鞍 置いて、彼の僧に賜びにけり。判官、五位尉になられし時、五位になして、大夫黒と呼ばれし馬なり。一の谷の鴨越をも、この馬にてぞ、落とされたりける。

「大夫黒馬埋處」碑とは別に、松平頼経が元禄十六年（一七〇三）に造らせようとした碑もあった。頼経が死去したために建碑に至らなかつたが、儒臣十河保定の撰進した草稿が屋島寺に残されていて、『牟礼町史』旧版（六一四頁）に翻刻されている（『翁媪夜話』『三代物語』にも所収）。それによると、この馬の初名が「淡墨」（字義からすればウスマスミと読むのだろう。『翁媪夜話』『三代物語』は「淡」にウスと読み仮名を振る）で、のちに「大夫黒」になったという。『盛衰記』と『平家』の矛盾を整合化する内容になっている（延慶本もこれに似るがおそらく同本は流布していない）。『盛衰記』にあつた「宇治川をも渡し、一谷をも落せし事此馬也」は、この草稿の中にも見える。

そしてこの影響は、この墓地公園ではない別のところにも及んでいる。現地史跡「総門跡」にある「遠祖君乘馬薄墨碑」（これも昭和六年に佐藤信古が建立したもので、）でも、「遠祖君」すなわち佐藤次信の馬の名が「薄墨」になっている。そこには、「宇治、一の谷、屋島の諸役に従い」と『盛衰記』の影響を受けたらしき文言が見える。供養のために主君義経から納められた布施の馬の名（しかも『盛衰記』の）が、次信存命中の所有馬の名となつていたのである。

このように、当地の史跡には『盛衰記』の影響が深く浸潤している点は注意を要する。翻ってみると、松平頼重が「薄墨」ではなく「大夫黒馬埋處」碑を建立させていることから、頼重周辺は『平家』を享受していたことがわかる。おそらく頼重入部以前の現地史跡（次信石塔「いをち」は『盛衰記』の影響を受け、頼重の頃は『平家』に依拠して史跡整備され、佐藤信古の頃にまた『盛衰記』に拠るといった重層化を経ている。

### 3 総門（惣門）跡とは何か

総門（惣門）跡については、六万寺の大門跡だとする伝承が六万寺に伝えられている。のちに源氏勢（義経勢）の総門となったものの、それ以前は六万寺にいる安徳天皇を守るために平家が陣を張った場所とされる。総門の標柱が建てられている（建てられていた）ピンポイントが陣跡とは言えないはずだから、この総門と六万寺の間の地域が平家方の陣であったということだろう。屋島東町の「内裏屋敷」（安徳天皇社）の造営が間に合わなかったため、平家が入った初期のころにこの地域が行在所として使われたともいう。

総門も『盛衰記』に次のように出てくる。そしてこれが、現在の史跡たる総門跡の位置と矛盾しない。

さるほどに、夜も明けぬ。屋島より潮干潟一隔、武例・高松といふ所に焼亡あり。平家の人々、「あれや、焼亡、焼亡」といひければ、…（中略）…先帝を初め奉り、女院・二位殿以下女房たち、公卿・殿上人、屋島・惣門の渚より御船にめさる。

「屋島・惣門の渚」とあるが、この「屋島」は屋島・高松・牟礼を総称した言い方で、前からの文脈では、牟礼の惣門（総門跡）だろう。

義経勢が攻めてくる直前の場面で、民家の火災が起こったのを源氏の襲来と思い込んで「阿波民部成良（重能）に思い込まされて」平家の人々が「惣門の渚」から船で沖に出る場面である。常識的に考えれば総門などという仰々しい名前が付けられるのは屋島内裏のそれではないかと考えそうだが、右の傍線部のように、総門があるのは「武例（牟礼）・高松」である。牟礼川の北東が「武例」、南西が「高松」だろう（現在の地名とずれる）。そこが「屋島より潮干潟一隔」<sup>ひとぐだて</sup>というのは、現地の地理感覚と整合する。伝承にあるように、「屋島内裏」がまだ造営中であって、仮の御所として平家一門が牟礼・高松にいたとすれば、そこに総門があっても不自然ではない。右の引用文より少し前に、次のよう

な一節がある。

屋島には、伝内左衛門尉成直が伊予国へ越え、河野四郎通信を攻めけるが、通信をばuchi漏らして、その伯父福良新三郎以下の輩、百六十人が頸を切つて、姓名注してまゐらせたりけるを、内裏にて首実験かわゆしとて、大臣殿の御所にて実験あり。

屋島内裏で首実験ができないとの理由で「大臣殿（宗盛）の御所」でそれを行ったというのだから、そこは屋島内裏から離れた場所であるべきで、「屋島より潮干潟一隔」の「武例・高松」という表現とも符合する。屋島内裏が完成したあかつきには、その内裏に安徳天皇、建礼門院、二位の尼らが住み、牟礼には宗盛らが住むといった住み分けが想定されていたとみることもできる。

屋島側が安徳天皇で、牟礼側が平宗盛（大臣殿）だとする（東西）振り分けの認識は、『盛衰記』の那須与一の場面にも見える（先述第七節）。すでに源氏が押し寄せた後の場面なので、平家方は牟礼の陸地にいるわけではない。しかし、海上においても、西に安徳帝、東に宗盛という構図認識は存続していたらしい。

現地史跡「総門跡」が海沿いに立地していたとすることについてはすべての古伝承・古記録の一致するところであり、そのことは右の「惣門の渚」の表現とも符合する。もちろん六万寺の総門であったとの寺伝と矛盾するものではなく、総門の東側一帯が平家の陣として活用されたために一時的に平家屋敷群の総門にもなったのだろう。

「屋島より潮干潟一隔、武例・高松といふ所」などという表現は現地の地理を知らないでは書けないものであるので、現地史跡が『盛衰記』の影響を受けて設置されたのではなく、現地の伝承が『盛衰記』に採り込まれた可能性もある。

#### 4 射落島とは何か

現地史跡に「射落島」がある。佐藤次信が平教経に射られて馬上から落ちたとの伝承をもつ。「射落」の表記からすれば、たしかに、誰かが射られて馬上から落下したことを想起させる。しかし、本当に次信が射られた地なのだろうか。牟礼町の次信墓地公園が次信の遺体を火葬にしたところだとすれば、義経勢が軍を引いたベースキャンプに当たるはずである。地名「次信」（屋島東町）の存在、その地の五輪塔の存在（國學院本）、複数の古地図の「次信ノハカ」「次信墓」の表記、菊丸の墓（屋島東町）の存在の相互補完的な関係からみて、一六四二年の時点で次信最期の地が屋島側だと認識されていたに違はなく（先述第1項）、松平頼重と同時代の國學院本に別の「次信忠死の地」として射落島が描きこまれているとは考えにくい。少なくとも江戸初期まで「いをち」は次信関係の史跡ではなかった可能性が高い。國學院本は一方で「次信石塔」「次信やきは」と記すのに、ここには「次信いをち」とは書かれていないのである。

牟礼側にある源平攻防ラインに関わる伝承地はほとんど後次的なものであり（先述第六節第6項、『平家』や『盛衰記』に表現されているそれと大きくずれる。こう考えると、現地史跡「射落島」で次信が教経に射られたとする伝承は、誤伝である可能性が高い。

國學院本は「射落島」のところに「いをち」と記し（「い」の一面目は判読不能だが二画面「」の存在と現地史跡との符合によって「い」であることが判明する）、そこに大きな楕円形の石を描いている。漢字表記「射落」ではなく、「島」でもない。そもそも大きな石のあるところは島（畑）にならない。國學院本にわざわざ「惣門より廿七間」と注記があるのは、「総門」が高い標柱のある目立つ施設であるのに対して「いをち」の目印である平たい石は目立たないものなので、史跡標示のない時代にあつては必要な情報だったのだろう。「二十七間」は約五〇メートルで、現在の両史跡

の距離と一致する（先述第五節第2項のように、「惣門」と「いをち」は五〇メートルほど東に移動させられた可能性が高いが）。この石こそが「いをち」だという書きぶりでも、少なくとも畑ではない何かだったのだろう。

『盛衰記』の文脈を追いながら國學院本を見ると、那須与一関係の史跡は「いのり岩」が描かれているのみだが、次信関係の史跡は「次信石塔」「次信やきは」はその文字だけでなく五輪塔や丸い墓石まで丁寧<sup>ていねい</sup>に描かれている。何を描いているのかだけでなく、何を描いていないかも大切だが、國學院本の紙面の範囲内にあるはずの六万寺が描かれていない。六万寺は天平年間の創建と伝わる由緒ある古刹であり、もちろん源平合戦当時にも存在した格式の高い寺である。それが描かれていない。ということは、冒頭で推察したように、國學院本は網羅的に地名を入れた地図なのではなく、屋島合戦の史跡を中心に描かれたものだと考えられる。なにしろ、六万寺を描かないのに、一方で義経の「くらかけ松」まで描いているのである（六万寺は安徳天皇行在所ではあるが合戦の舞台でなかったために割愛されたか）。こうして突き詰めてみると、「いをち」はやはり屋島合戦の史跡でありながら、次信の射られた地ではない、別の伝承をもつ場所と考えたほうがよい。

そこで参考になりそうなのが、『盛衰記』の次の一節である。

（義経勢は）継信・光政が死骸を昇<sup>か</sup>きて、当国の武例・高松といふ柴山に帰り給ひて、その辺を相ひ尋ねて僧を請じ、薄墨といふ馬に、金覆輪の鞍置いて申しけるは、「心静ならば懇<sup>ねんろ</sup>にこそ申すべけれど、かかる折節なれば力なく、この馬・鞍をもつて、御房の庵室にて卒都婆（を立て）経を書き、佐藤三郎兵衛尉継信・鎌田藤次光政と廻向して、後世を弔ひ給へ」とて、舍人に引かせて僧の庵室に送られけり。

『盛衰記』では弟忠信が負傷した兄次信を肩に掛けて退却し、引いたところで次信が義経に看取られながら息を引き取ったことになっていて、その地は屋島墓の位置だと考えられる。そこから「死骸を昇きて」この牟礼の地まで撤

退したということだろう。この書きぶりからすると牟礼・高松の近辺の「僧」の「庵室」が二人の弔いの場所になったことになる。「いをち」はその庵のあった地、「庵地」なのではないか。大きな平たい石のある場所は畠(畑)にはならないと述べたが、庵や宗教的聖地が岩石の上に立っている事例は全国に数多くある(たとえば京都市伏見区日野の方丈石は鴨長明の庵室跡。ほかに岩手県平泉町の達石窟、山形県天童市の立石寺、滋賀県東近江市の太郎坊宮など)。「いをち」は歴史的仮名遣い「いほち」と異なるが、「射落」の歴史的仮名遣いも「いおち」であって「いをち」ではない。國學院本の描かれた江戸初期には、仮名遣いはかなり乱れていたのである。

「庵地」という姓がある。日外アソシエーツ編集部(一九九八)によれば「庵地」で「いおち」と読む姓がたしかにあり、「射落」で「いおち」と読む姓もある。「いおち」つながりで、「庵地」が「射落」に転化する可能性があるということだ。<sup>17)</sup> もちろん「庵地」は、庵のあった地<sup>18)</sup> という意味合いが自然に付随してくる。宮本洋一(二〇一九)は「江戸時代にあった門割制度の庵地門」から付けられた姓だというが、本当のところは、全国に散在するイオチ姓(「庵地」「伊大知」「井落」「伊落」「射落」「伊尾知」)は大和国十市郡庵治村から派生した姓だと考えられる(地名辞典類)。そこに次信供養伝承が付会された可能性は考えられないだろうか。

当地でいえば、地名「庵治」(アジ・アヂ)との関係も気になる。「庵治」の由来については、弘法大師が掘ったと伝える阿伽井の泉があり、その上の石に阿の字が刻まれていたことによるとする説、葦の生えている地、つまり葦地が「あぢ」となったという説などがある。アヂ姓(安治)「阿字」「網師」「阿治」「阿路」「庵治」の一部は「庵地」(いほち)と同根なのではないだろうか。大和国を共通のルーツとするアヂ(庵治)とイホチ(庵地)が当地に地名として存在していて、後者に次信供養伝承が付会されたという想定は可能だろう。この地名は、古くは「庵」の字と切り離しにくいつながりをもっていたようだ。

先述のように、現地史跡の多くは『盛衰記』をもとに形成されたものと考えられる。『盛衰記』によれば、次信に関わる重要な土地は、(1) 平教経に射られて主君義経のそばで落命した地、(2) 義経が次信を茶毘に付した地、(3) 近隣の僧が大夫黒という布施を得て次信の菩提を弔った地の三か所である。一方で現地には(1) 次信最期の地(屋島墓)があり、(2) 茶毘に付された場所(牟礼墓)があるのだから、『盛衰記』の読者たちならば右のような(3) 供養の地が物語に登場するのにそれを無視したとは考えにくい。以上のことから、江戸初期までは「いをち」は、次信を供養した僧の庵の地<sup>2</sup>という伝承をもつ土地であったと推測しておきたい。

その後、物語がよく読まれない時代が訪れ、絵図や『盛衰記』によって〈屋島の平家〉〈牟礼の源氏〉の認識が独り歩きしたのだろう(先述)。すると、平教経が源氏方に攻め込んだとすれば、牟礼側に押し込むかたちになる(西↓東)。それが、本来の「いをち」(次信供養の僧侶の庵地)から「射落島」(次信が教経に射られた)に変容した根本的な理由だろう。この庵の跡地には、江戸初期まで五輪塔が存在したようだ。それが、一六四五年に次信墓地公園内の「佐藤次信墓」碑の後ろに移設されたと考えられる(後述第7項)。

次信の供養伝承については、六万寺、洲崎寺はもちろん、志度寺にもこれがある。洲崎寺では毎年三月一九日に次信慰霊法要が行われているし、志度寺境内には昭和六年に佐藤信古が建立した覚阿上人塔があり、また『宝蔵院古暦記』にも覚阿上人が次信供養に関わったとの記述がある(『牟礼町史』旧版・新版)。いずれも真言宗系の寺院であり、本寺・末寺の関係や寺領の範囲が絡む問題になる。ただ、供養する行為は独占的なものではなく、複数の寺院で次信や大夫黒の供養が行われてきたと考えてもよい。

## 5 大夫黒の墓

本節第1項「鎌田光政伝承の後次性」に関係する問題である。『牟礼町史』旧版(六一七頁)では、「鎌田兵衛尉疑塚」碑に引きずられたためか、「大夫黒馬埋處」碑に向かつて右後ろの五輪塔の写真のキャプションに「鎌田光政の墓? (右の五輪塔)」と記している。「?」が付けられているのは、「鎌田兵衛尉疑塚」碑の内容がよく読まれていたからだろう。この碑は佐藤次信とともに鎌田光政(兵衛尉)も一緒に討ち死にしたとの先入観に縛られているので、ここに二基ある五輪塔の一方が次信の墓であるからもう片方が光政のそれであろうと推測したものである。碑文によれば、佐藤信古は当地でこの墓を探したが見つけることができず、次のように推測するに至る。

たまたま二石塔ありて阡上に並立するを見る。相隔ること十余弓、その一墓後にあり、その一少し屏しりぞいて左ひだりす。  
 …(中略)…皆五層をなし、嵩さ五尺許り。圜之に称う、蒼苔蒙被し、大抵数百年外の物たり。信古以為らく形色の同じき、吾が索むる所の者、乃ち是なること無からんや。疑以つて疑を伝へ、後人を待つこと亦可ならずやと。

二基の五輪塔の距離を「相隔ること十余弓」と記しているが、たしかに次信五輪塔と当該五輪塔の距離は弓丈にして「十余」、二〇メートルあまりである【**図20**】。「その一墓後にあり、その一少し屏しりぞいて左ひだりす」とあるのは、一つ目の五輪塔は次信の墓のすぐ後ろにあり、もう一基は少し離れて奥まっている。だろう。「左す」は、低い位置に下がる意で、次信五輪塔から離れつつ、しかも奥に下がっていることを言ったものと考えられる。

佐藤信古が当該五輪塔を鎌田光政の墓石だとしたのは、かなり強引な見立てである。同じ日に討ち死にしたのだから、次信の五輪塔と同じようなものがあるに違いないとの思い込みから、「形色の同じき」と言っているが、実際には形も色も大きさも異なる。造られた時代性も異なる。共通しているのは、どちらも五輪塔だということだけであ

る。信古説にして認めるべき点があるとすれば、疑わしいものは疑わしいものとしてそのまま伝えるので後世の人が判断してほしい（傍線部）と言った誠実さである。この碑が「疑塚碑」と名づけられたゆえんである。

『牟礼町史』新版（八〇五頁）では、旧版にあった「？」が削除され、当該五輪塔の写真が「鎌田兵衛尉疑墓」と称されている。趣旨としては旧版・新版同じであり、「鎌田兵衛尉疑塚」碑に依拠するばかりで、そもそもこの碑文が『盛衰記』に基づいていることや、『平家』や周辺史料に鎌田光政がいつさい出てこないことなどが調査されていない。第1項で述べたように、当該五輪塔は鎌田光政のものではありえない。

では、当該五輪塔は誰の墓なのか問題になる。この墓地公園の平面図を見るとすぐわかるが、これは大夫黒の墓だとみられる（大夫黒の墓だと見立てられていたものと考えられる）【図20】。これには二重、三重に誤解が加わっている。そもそも、ここの石碑には「大夫黒馬埋處」「大夫黒馬」は、女性の場合その名に「女」を付けて「汀女」などと称するのと同じ方式とある。五輪塔の存在しない墳丘墓が本来のかたちである。直径五〜八メートルほど、高さ六〇センチほど、野球のピッチャーマウンドのような形状の盛り土が現地にある。松平頼重が一六四三年に建てさせた「佐藤次信之墓」「大夫黒馬埋處」の石碑は、墓の存在を示すための目印であって、これらそのものは墓石ではない（先述）。墓石の本体は、次信の場合は石碑の背後の五輪塔（もとは球体墓）であり、大夫黒の場合は墳丘墓であったはずだ（第一段階）。最初から馬のために五輪塔が建てられるとは考えにくく、「埋處」の表記から見ても、松平頼重の頃は墳丘が大夫黒の墓であることが理解されていたようだ。次の段階で、ここに五輪塔がどこからか移設されて大夫黒の墓とされ（第二段階）、佐藤信古によってこれが鎌田光政の墓とされるに至ったのである（第三段階）。

## 6 佐藤次信墓の数十メートル移転

牟礼町の次信墓地公園の西隣に、神櫛王かみしおうの墓という史跡がある。神櫛王は景行天皇の皇子で、讃岐国造の祖とされる人物である。古くから「王墓」と呼ばれ、國學院本では「大はか」と記されている。國學院本はその東麓に「次信やきは」（次信焼き場＝火葬場）と記している。現在、王墓の背後（南麓）に王墓池（平田池）が存在するが、これは松平頼重の命によって、正保二年（一六四五）に築かれた池である。頼重が「佐藤次信墓」碑、「大夫黒馬埋處」碑を建立したのは、その二年前の寛永二〇年（一六四三）のことである。

これに関連して、『牟礼町史』旧版の「嗣信墓」（六〇七頁）に「もとは今の墓の後の王墓池（平田池）の地にあったが、正保二年にこの池を築造した時、今の地に移した。寛永二十年に初代高松藩主松平頼重公（英公）が新たに石碑を建てた」とある（新版（七九六頁）では正保二年（一六四五）、寛永二十年（一六四三）と西暦を入れているが文章そのものには変更なし）。この記述は前後関係が逆である。「新たに」とあれば、移転してから頼重がこれらの石碑を建立したかのように読めるが、石碑の建立のほうが先で、池の新造によって二年後に移転したのである。

では、次信の火葬場はどこにあったのか。その位置を示すが、國學院本である。それによると、現在地とほとんど変わらない位置であるように見える。かりに王墓の裏側であったなら、絵図では王墓の上（南）に描かれるはずだからである。ということは、池の新造によって次信の墓が移されたとしても、王墓の裏側から移されるほどの長距離ではなく、数十メートル程度であったろうということが推測できる。おそらく、現在の池の淵あたりから移されたのだろう。<sup>(18)</sup>

ここで問題になるのが、國學院本の「次信やきは」の上に描かれている球体墓である（水色に塗られていないので池ではない）。「大はか」との比較でみるとかなり大きなものであるように見えるが、「いをち」の平たい石もかなり大きく

描かれている（洲崎寺より大きい）ので、屋島合戦の史跡を強調して描く方針によってデフォルメされたものと考えてよい。常識的に考えれば直径数十センチ程度の石がそこに存在したのだろう。<sup>19)</sup>

現在の「佐藤次信墓」碑周辺に、その球体墓は存在しない。先述のように、「佐藤次信墓」碑は墓石そのものではなく、本来の墓石の位置を示す案内碑であったと考えられる。松平頼重が一六四三年に「佐藤次信墓」碑を建立した際は、球体墓が存在したものと考えられ、だからこそそれが國學院本に描かれ、頼重が「佐藤次信墓」碑を建立する気になったものと考えられる。ところが、二年後、池を造るために墓を移動した際、何らかの理由で（たとえば破損）移すことができず、松平頼重が作らせた新しい「佐藤次信墓」碑のみを移したということなのではないだろうか。

## 7 球体墓の破損と五輪塔の移設

もとあった球体墓が破損したという部分は、推測である。國學院本に球体墓が描かれているのに、現在地にそれが存在しないことから、そう考えたのである。では、現在地にある五輪塔は何なのかという問題が発生する。

現在地にある五輪塔が、よそから移されたこと記す史料がある。『牟礼町史』旧版・新版が紹介する『嗣信古刀記』である。これは、次信墓の地中から古い刀が出てきて、それが五、六百年前の逸品であるから次信の刀であるに違いないとして、志度寺に奉納されたことを記したもので（類似の内容は前掲の『翁嬸夜話』にもあった）、宝暦六年（一七五六）七月一六日の碑銘をもつ。

この碑文の冒頭に、次のような一節がある。

佐藤嗣信の墓、我が州三木郡牟礼町に在り。歲月、久遠にして、石の字、毀滅せり。かつ、その地、僻鄙にして、人迹、罕の至りなり。我が先君、英公（松平頼重）、その久しく湮滅せるを病み、命じて同郷大墓の東端に遷し葬

らしめ、墓碕を新たにし、その姓氏を勸せり。(原漢文)

江戸中期の時点での「牟礼町」という言い方は、もちろん近代的な自治体名と違って、中心地という意味だろう。現在、牟礼町牟礼の交差点のあるあたり(八栗駅の北)が中心なのではないか。「同郷大墓の東端」が現在地(ないしはその数十メートルほど奥)のことであるから、現在地ではない別の「牟礼町」内から「石」が移設されたことになる。その「牟礼町」は「町」と言いながら辺鄙なところである(僻鄙にして、人迹、牟の至りなり)とあるのは、遍路道(國學院本の阿波海道・志度道)から外れていて人目につかないという意味なのではないか。たしかに、現在の牟礼町牟礼の交差点付近は、その地域の中心地ではあっても、牟礼川の向こうなので東西の街道筋から逸れている。そこはまさに、「総門跡」「射落畠」のあるあたりである。

本節第4項で考察したように、國學院本の「いをち」はおそらく次信供養のための「庵地」であり、現在の「総門跡」にあったものと考えられる。つまり、現在の「総門跡」の位置に次信の供養をする僧の庵があつて、そこに次信供養の五輪塔が存在したのではないか。それを、松平頼重が現在地(次信墓地公園)に移設したのだろう。王墓池(平田池)の新造の際、球体墓を移そうとして破損させてしまったため、その代わりとして「いをち」にあった五輪塔を現在地に移したという推定である。そもそも右の碑文は現在地「大墓の東端」ではない、別の「三木郡牟礼町」に存在した次信墓を移設したという内容なのだから、現在地以外で次信墓が存在しそうな「牟礼町」は「いをち」以外に考えにくい。ゆえにこの推論は、「いをち」が次信討ち死にの地ではなく、供養の地であつたことと相互補完関係にあるものである。

この推定は、國學院本の「いをち」に五輪塔が描かれていないという弱点はあるものの、次信関係の史跡の代表は安徳天皇社の西北西の五輪塔であるとの強い意識がみられる(目印として遍路道がこだけ描かれている。先述)ことから、

それ以外の五輪塔は割愛されたのではないだろうか（当時存在したはずの大夫黒の墳丘墓が描かれなかったように）。

このように考えると、

- (1) 國學院本に球体墓が描かれているのに現在はないこと。
- (2) 現地史跡に五輪塔が存在すること。
- (3) 松平頼重が「牟礼町」内から現在地近くに次信墓を移した史料があること。

のすべての点が、整合的につながる。もとあった球体墓の破損でもないかぎり、神聖な五輪塔をやすやすと移すことは考えにくい。この五輪塔移設の史料と國學院本の存在が、もとあった球体墓の破損を物語っているのではないだろうか。<sup>20)</sup>

## 8 大夫黒の墓の移転問題

次信墓の移転問題に関連して、「大夫黒馬埋處」碑も、池の新造によって移されたようだ。『全讃志』卷十「大夫黒墓」によれば、大夫黒の墓も「これまた、池の内において」（原漢文）とあるので、次信墓と同時に移されたことになる。ところがこれにはもう一つ問題があつて、同書同項目には「次信の墓の北に在り」とある。現在は東西に並んでいるが、江戸後期には南北に並んでいたことになる。その南北が江戸後期以降のいつ東西に再整備されたのかは、今のところ不明である。現在の墓地公園周辺ではあろうが、次信墓・大夫黒墓は少なくとも二転したことになる。

## 9 『讃岐国名勝図会』の「内裏跡」の位置の問題

國學院本の「内裏屋敷」は次信の屋島墓の南東に描かれていて、これが現在の安徳天皇社の位置と一致する。県図

本・洲崎寺本も「内裏屋敷」の位置は、次信の屋島墓より南だとしている。ところが、名勝図会の「内裏跡」は屋島墓より北だとしている。これは単純な事実誤認ではなく、幕末には安徳天皇の御所と祀ったところとを別々だとする伝承があったらしい。

『屋島名勝手引草』（明治三年（一八九八））は、項目「佐藤次信墓」の次に「安徳天皇社」を上げ、「同所、深林の中にあり」と説明しつつ、それとは別に「内裏跡」を立項して「安徳天皇社の十丁斗ぼかり北、字石場と云へる所の山腹にあり」という。安徳天皇社から北に「十丁」ばかり（二キロメートル強）北上すると、たしかに石場の小字があり、石場公民館、石場港などがある。この斜面の中腹に安徳天皇の内裏の伝承があったらしいが、江戸中期までの古地図にはなく、また現在も伝承されていないことから考えて、幕末から明治期まで新たな史跡として押し出そうとしたものの定着しなかったものとみられる。石場を安徳天皇の内裏だとする伝承は、もう一方の安徳天皇社を、帝の霊を祀った地として差別化していたようである。

## 一〇 國學院本のその他の注目点

これまでに、那須与一関係伝承の変容、佐藤次信関係伝承の変容、現地史跡に『盛衰記』の影響がみられることを指摘してきたが、これら以外で國學院本の注目すべき点を挙げておく。<sup>21</sup>

### 1 源氏はな

國學院本では「惣門」や「いをち」より東に「源氏はな」が描かれている。この名称は、現在、伝えられていない。

「はな」の地名表記はふつう「鼻」で、全国に点在する「長崎鼻」のように岬状の地形に付けられる。現地では白羽神社の山が、まさに五剣山の南稜の末端、岬状の小丘陵に相当する。幕末の名勝図会では、「八幡宮」と記されている。この「はな」に源氏が陣を張った伝承があったから、「源氏はな」と呼ばれたのだろう。おそらくこの微高地から平家方の様子を窺って、西へと攻め込んだとする伝承があったに違いない。しかも、当社は源氏の尊崇する八幡神を祀る（菅田別之命、神功皇后）。ここには産土神うぶすまのかみたる楠ノ窪神社がもともと祀られていて、その後、白羽八幡宮（白羽神社）と改称したという。産土の神が八幡神へと変容する転換点に、「源氏はな」と称された屋島合戦伝承の影響を想定することができる。

## 2 大島の属島の名称

屋島の北に大島があるが、その西に浮かぶ二つの属島に現在とは異なる島名が記されている。現在では北を弁天島、南を矢竹島と称しているが、國學院本では「ゆりふた嶋」と記している（濁点が前後の文字にずれることはよくあるので「ゆりふだ」だろう）。「ゆりふた」は「許り札ゆるい」で赦免状を意味すると考えられるが（「ゆり」はラ行上二段動詞「許る」の連用形か）、伝承の内実については不明である。伊能図では三つの島の真ん中の名が「ユルフタ嶋」。『天保国絵図』では大島の西に「はたか嶋」「乃嶋」「小はたか嶋」が見える。「ゆりふた嶋」は「乃嶋」に相当するか。これだと二島ではなく三島ということになる。現在でも大島の南西に大きめの岩礁があり、これを島だと認識するとすれば、二島と三島は矛盾するわけではない。瀬戸内には裸島の名がいくつか見え（住民がすべて裸であるとの伝承を持つか。『保元物語』の為朝渡島譚など）、近海では坂出市の塩飽諸島に「コシキ（大裸島）」「小裸島」がある。

なお、大島の東に浮かぶ兜島、鏡島、稲毛島を國學院本が描いていないのは、古高松あたりから見えないからだろう。

### 3 八栗山か五剣山か

現在では地名辞典等で「五剣山（八栗山）」と表記されることの多い東側の山について、國學院本では「五剣山」の表記がなく、「八栗」とのみ表記されている。ただし、この山の頂上付近に五本の剣が立ったような岩が描かれているので、五剣山の通称が当時すでに存在していて、それを絵で表したものかもしれない。それにしても、当時は「八栗」のほうが一般的呼称であったことがわかる。

### 4 屋島に最初に架けられた橋

國學院本では県本土と屋島をつなぐ橋（相引川を渡る橋）が一本だけ描かれていて、そこに「橋／古ハなし」つまり昔はなかったと記されている。現在では西の屋島大橋から東の高橋まで大小一四本の橋（二本の鉄道橋を含めると一六本）が架けられていて陸続きのような感覚になっているが、その最初に掛けられた橋が記されているということである。前近代の橋は陸地どうしの近いところに架けられるものであろうし、國學院本でも屋島側の山裾がもつとも南に延びたところに架けられているので、現在の古高松駅から相引東公園あたりまでの間だと考えられる。義経が相引川を渡ったとの伝承をもつ赤牛崎の東に赤牛橋があり、國學院本に描かれた橋は、その前身である可能性もある。このように國學院本は、街並みの変遷をたどる資料にもなりうる。なお、『天保国絵図』にも、一本だけ屋島に渡る橋が描かれている。これと國學院本の橋は同一のものであろう。<sup>(22)</sup>ただ、橋の存在を自明のこととせず、「古ハなし」と橋が存在しなかったかつての記憶を留めているぶんだけ、國學院本はやはり古いものであるといえよう。

## 5 棧敷岡

國學院本には、南の丘陵（現在の妙覚寺付近）に「棧鋪岡」さじきがたか（棧敷岡）の地名が記されている。もともと源氏勢の陣は瓜生山（宇籠ヶ岡）だとする伝承が存在する（名勝図会）ので、それと大きくずれるものではないが、その名称は、まるで源平の合戦を見物する棧敷であったために付けられたものであるかのように見える（後世の付会だとしても）。管見に及ぶかぎり、他にこの名称を見ない。

## 6 史跡の新旧

現在一般に知られている屋島合戦伝承地の多くが、國學院本には記されていない。たとえば、赤牛崎<sup>23</sup>、菊丸墓、義経弓流の地、景清鋳引きの地、菜切地藏、長刀泉などである。実際には存在したが省略されただけである可能性もあるので慎重に考えねばならないが、これらが國學院本製作年以降につくられた史跡だとみる必要があるのかもしれない。逆に、古高松の「義経鞍掛の松」が江戸初期にすでにあったことに驚かされる。それぞれの史跡がいつごろ認定されたのかを【表1】に示した。

現地史跡には「香川縣國立公園協會」の石標が建てられているところも多いので、その有無を示す「国公協碑」欄も設けた。七か所に設置されたこれらの石碑は、いずれも縦横二一〇センチメートル（下部が土中に埋まっているので高さは計測できない）の正四角柱（底面が正方形）である（二つの箕輪石碑は縦二一センチメートル×横三二センチメートルの平べったい形）。国内最初の国立公園として瀬戸内海国立公園が指定されたのは昭和九年（一九三四）のことで、香川県国立公園協会（香川県庁公園課内にあった）が発行した旅行案内の類は横書きを右から左に書くものがほとんどであるので、協会としての活動期は戦前であったと考えられる。同協会が最初に発行したガイドブック『遊覧讃岐』（一九三四年、

国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで閲覧可能)の「讃岐に於ける史蹟名勝」にはまだ牟礼・屋島の源平合戦の史跡は収載されていないので、当地に現存する「香川県国立公園協會」碑は、おおむね昭和一〇年代に設置されたものとみてよい。

## 一一 おわりに——國學院本の価値——

國學院本の史資料的な価値は、次の二点に集約することができる。

- 1、牟礼・屋島周辺の入浜式塩田が開発される以前の海岸線を留めた、貴重な古地図である。とくに牟礼側の史跡の移設が海岸線認識の変容に伴うものであることは、國學院本の存在によって初めて明らかになったことである。

- 2、屋島合戦伝承の江戸初期における史跡が國學院本に描きこまれており、現地史跡とその位置関係や名称の異なるところがある。江戸初期の当地周辺の地図には『寛永讃岐国絵図』とその類書が数種類あるが、地名や史跡が細かに記されているものとしては國學院本が最古であり、江戸中期以降に変化してゆく以前の位置や名称を留めている可能性が高い。その後の現地史跡の変容を窺う際に、國學院本は起点となる資料である。

\*

\*

一般に、史跡が「あとから作られた」とか「移設された」ことを否定的に捉える傾向が根強いが、物語世界はもともと虚構の空間である。新旧の史跡がある場合、古いほうを「史実」というのは誤りであって、それさえも物語世界を現実空間に落としこんで受け止めようとしたものである。たとえば、アニメ映画『君の名は』のモデルになった

湖、神社、駅、図書館などが聖地化してそこにファンが押し寄せるという現象が起きた。アニメは虚構世界だとわかっていても、リアルなものとして現実空間の中で受けとめ直したのである。

もっと掘り下げれば、人間の認知の必然として、興奮や感動をおぼえた時にはそれを誇張して伝えたいと思うし、それがゆきすぎて非現実的になれば逆にリアリティの方向に引き戻そうとする。映画やドラマで、実写版がアニメ化されたり、アニメが実写版化されたりするのは、そもそも人間が自らの精神の安定のためにリアリティとフィクションリティのバランスをとろうとし続けていることを示している。夢がないのもつまらないし、非現実的なのも興ざめする。裏を返すと、人間はリアリティも担保しつつ、夢を与えてほしいと願うわがままな存在である。

近年、ある古文書がじつは偽文書であることを明かし、当地の郷土史家に衝撃を与えた研究がある。その研究自体に異を唱えるものではないが、われわれはそろそろ「史実にこそ価値がある」「虚構には価値がない」との認識から卒業しなければならぬのではないかと。新聞等でも、遺跡・遺物・古文書の発見ばかりがもてはやされ、そのたびごとに「真相」が明らかになったと喧伝される。その姿勢自体が、ある種の偏向をはらんでいることに気づかねばならない。

過去の事実だけでなく現在のそれでさえ必ず誰かの認識というフィルターを経て伝えられる。同時代の事件をめぐっても、複数の新聞で掲載面、記事の大きさ、文章の内容、写真の有無や切り出し方に差があることは、小学校で学ぶことである。話には尾ひれが付きやすいし、好き勝手に伝えられる。もともと事実などというものはない。とまでは言わないが、もともと事実は捉え方によって変わる多面的なものであり、それを伝えようとするれば必ず偏った、あるいは切り取ったものしか伝えられないのである。

まして、牟礼・屋島のように外在的要因として地形が変われば、それに伴って人々の空間認識も変容する。讃岐は

降水量の少ないことで知られ、灌漑用のため池が多く作られた。屋島合戦の地でいうと、神櫛王墓の裏の王墓池(平田池)がそうである。この築造によって次信墓が移設され、おそらくその工事のさなかで本来の墓石が破損した。また、飢饉など民の苦境が続く中、高松藩五代藩主松平頼恭が塩田開発に乗り出した。それによって屋島合戦の舞台は、海岸線の様相が大きく変わることになり、人々の空間認識も変容した。民びとを救うためである。

ゆえに、史跡の移設や解釈の変化をめぐって、これは後世になって作られたもの、これは本物ではない、などと軽々しく言うべきではない。それは、一部分だけを切り取った評価ではない。巨視に立ち、史跡が変容せざるをえなかった社会的背景をも含めて考える必要がある。『地域に誇りを持ちたい』とか『隣村に負けたくない』と願う民びとの願いを聞き入れて寺社が動いていたのだろう。

文学研究には物語や和歌そのものの研究とは別に、それらが後世にどのような影響を与えたのかを研究する『享受史』という分野がある。歴史学者が文献史料や現地の地形を見て『これは史実とは違う』と指摘することにももちろん意義はある。史実を追究するのも大切な仕事である。それと違って文学研究者は、なぜ変容したのか、その理由に寄り添いながら考える立場である。そのような立場に立つて屋島合戦伝承を見直してみると、違ってしまったこと以上に、姿かたちを変えながらも伝承の核心が連続と継承されてきた事実には驚かされる。史跡の新設も移設も、物語世界を大切に継承するために先人がたゆまずこれに関わり続けてきた証左だろう。ゆえに、本稿によって江戸初期の屋島合戦伝承の姿が明らかになったとしても、今後も、新旧ともに大切にされ続けることを願っている。

本稿は、國學院本『讃州矢嶋之図』の発見に触発されて現地史跡の変容を取り急ぎ考察したものであり、全容解明のための叩き台に過ぎない。本稿で検討したもの以外に、高松藩の記録類、寺社の古文書、役所が保管する土木や河川管理の資料等を参照することによって、本稿の修正や肉付けがなされることを期待したい。<sup>24)</sup>

## 注

(1) 山口県下関市の「壇の浦」も源平の古戦場なので紛らわしいが、下関のほうを「壇の浦」、高松のこちらを「檀の浦」と使い分けたとする説がある。たしかに屋島のほうは「檀」を用いた古地図・絵図が多い。しかし、「壇」もないわけではない。「壇」と「檀」で使い分けたとするのは、双方を視野に収めて区別しようとする近代人の感覚だろう。そもそも地名は、それぞれの地元の人々が付けるものである。それに、史資料上で一つの地名を「壇」と書いたり「檀」と表記したりする程度の揺れはあちなことなので、厳然とした区別があったとは考えにくい。そもそも「浦」とは入り江ないしはそこに面した浜なので、地形的には屋島のほうが符合する。関門海峡の両岸は入り江と呼べるようなところがなく、通称されているように「早鞆の瀬戸」といったほうがしっくりする。「対岸の北九州市門司区にタノウラ（田の浦）があるが、そこもあまり入江らしくない」。つまり、ダンノウラは本来、高松市のほうの地名であって、物語世界で源平最終決戦の地である関門海峡のほうにその地名が飛び、そこから実際に現地（赤間神宮下）をそう呼ぶようになったのではないだろうか。この推定が正しければ、源平の最終決戦のことを「壇の浦の戦い」などと呼べなくなる。物語によって、われわれは幻惑されていたのではないだろうか。

ちなみに、字義を考えれば、ダンは「壇」では意味をなさない。古代の屋島に軍団が配置されたから「団」の浦だとする俗説もあるが、その根拠はない。また、入江の周辺が段丘状なのであれば、「段」が伝承されるべきだが、その文献はまったく存在しない。しかし、「檀」ならば檀（マユミ）の群生している入り江の意味になる。マユミ（真弓）は山地の林内や林縁に生える落葉小高木（高さ約三メートル）で、材質が強い上によくしなるので、古くから弓の材料として知られ、和語ユミの語源になったか、あるいは逆に弓の材料となったためにこの木がマユミと呼ばれるようになったとされる。紅葉の美しさからニシキギ（錦木）とも呼ばれる。日本全土でみられるので特別な樹木ではないが、現在、屋島周辺でもマユミの自生を確認することができる。『牟礼町史』（旧版、六九六頁）の「八栗山の植物」にマサキ、コマユミ、ツルウメモドキ、ニシキギの四種類のニシキギ科植物が掲載されている。また、

吉田絃二郎「煙れる田園」(一九三三)に、「菊王丸の墓を掩ふ様にして、繁っているまゆみの真つ紅な実」「菊王丸の墓のまゆみの実」とあるように、たしかにこのあたりに檀が自生していたようだ(『新修高松市史』二七九頁)。

なお、國學院本は江戸初期の作例と推定されるが、その平家屋島内裏付近に、まるで浜の名称であるかのように「たんの浦」と書かれている。ダンノウラは、古くは入り江ではなく浜の名称であった可能性がある。

(2) 佐藤ツギノブは、ツグノブとも読み、『平家』諸本でも次信、継信、嗣信と表記が揺れている。本稿では、松平頼重建立の石碑に従って「次信」を用い、洲崎寺慰霊法要での読み方にならってツギノブと読む。

(3) 一般には「現存史跡」の語を用いるが、本稿では「現地史跡」を用いる。現存はしていても、現在では史跡とは認識されていないものもありそうだからである。〆現地で史跡と認識されている史跡〆の意味で「現地史跡」を用いる。

(4) 与一公園は、平成一八年一月一〇日の市町村合併により、旧牟礼町から高松市に下水道施設(牟礼浄化苑の一部)として引き継がれた土地で、その後、平成二八年四月に下水道施設課から未利用地の財産処分として公園緑地課に公園用地として移管されたものである。牟礼浄化苑は昭和五四年一〇月の供用開始で、昭和四〇年代までは塩田として利用されていた土地である(高松市公園緑地課)。

(5) このあたり二本の県道が南北に平行に走っていて、その間に市道も走っていて紛らわしい。相引川に近いほうから県道155号牟礼中新線、市道30号線、主要地方道36号高松牟礼線だが、本稿では、海寄り県道、市道、山寄り県道と呼ぶことにする。

(6) 「段」という距離の単位については、二説ある。一つ目は一段を二・七メートルで計算するもの(鎌倉期以前)、二つ目はそれを約一メートルとするもの(室町期以降)で、「七段ばかり」だと前者は約二〇メートル、後者は約七七メートルとなる。「那須与一」だけを読むのなら二〇メートルが良く、「遠矢」と関連づけて読むのなら七七メートルと解釈せざるをえない。なお、この問題を初めて指摘した山口正(一九六一)にも、「一段二・七メートル」から「一段一一メートル」へと移行した境目が鎌倉末期あ

たりだとする言及はないが、「那須与一」が独立して伝承されていた時期とそれが『平家物語』に採り込まれた時期で差異を生じていることから、その時期がおのずと推測できる。

(7) 名勝図会の巻四に「八丁石」が見えるが庵治町御殿山の西沖一五〇メートルに現存する岩礁で、別物である。同書は「妄説多し、信じがたし」とする。牟礼の「八丁石」との混同が生じていたものか。

(8) 当地の塩田事業は、国の政策転換によって昭和四六年（一九七二）に廃止となった。塩田の面影を後世に残すべく刊行された日本専売公社四国支社塩事業部（一九七三）に宮北川河口を写した一枚の写真「牟礼塩業組合の塩田風景」（南浜（前方右）と柏納屋浜）があるが、これには「八丁石」の残骸がみられない。これによって、わずかに残っていた「八丁石」の痕跡が削り取られた時期が、一九六四年から七三年までの間であることがわかる。なお、「八丁石」の写真は香川県立図書館のデジタルライブラリーで公開されている『讃岐写真帖』（一九一六）の「壇の浦」という写真（55コマ目）にもかすかながら写っている。

(9) なお、文献上の「石」と「岩」の表記の違いについては、あまり意識する必要がない。「石清水」と書いてイワシミズと読むように、『屋島名勝手引草』でも「祈石」「駒立石」の「石」に「いわ」と読み仮名を振っている。しかし一方で、同一人物たる箕輪野鹿が「いのり岩」「こま立石」と使い分けていれば、それは形態の差異によるものと考えるべきだろう。この件については、ケースバイケースで考える必要がある。

(10) 『屋島名勝手引草』（明治三二年（一八九八））の巻頭「屋島附近の地図」によると、「祈石」は、山寄り県道沿いのそれでよいとして、「駒立石」をその真北としている。ただしこの地図は、対岸を見ると、「次信墓」「内裏跡」「菊王丸墓」の三史跡がこちらの「祈石」「駒立石」よりも南の緯度に位置するものとして描かれている。これは明らかな誤りである。史資料から推測される塩田のかたちと同図のそれとを比べても、東岸と西岸で北進のバランスがよくない。このようなずさんな地図であるので、同図の「駒立石」は正確な位置を示したものではないと考えられる。

(11) 金毘羅「田圃の中にあり」、名勝図会「海中にあり」を合わせると、浜辺ということだろう。金毘羅の「田圃」は時代的にみておそらく塩田のこと。塩田が潮水で満たされた時には「海中」になる。少なくとも幕末の「祈り岩」が國學院本のような微高地にあつたら、このような表現にはならない。一八九八年の『屋島名勝手引草』も「海浜にあり」とする。なお、一七四七年の『翁嫗夜話』巻四「駒立石」「祈り岩」をまとめて「洲崎寺の北浜に在り」としているが、これらは塩田開発より前なので与一公園の北端の「いのり岩」と「八丁石」を指したものとみるべき。一七六八年の『三代物語』も二石をまとめて「洲崎寺の北浜に在り」とするが、牟礼側の塩田開発がちょうど始まったころであり、解釈が微妙になる。ただし同書は先行する『翁嫗夜話』の引き写しの部分が少なくないので、古い認識を留めている可能性もある。

(12) 高松市公園緑地課によれば、このモニユメントは旧牟礼時代の平成三年（一九九一）、彫刻家の空充秋氏（そみつぶあき）によって制作された「与一は何をした」。タイトルからそう問いかければ、見る者は「困難を乗り越えて扇の的を見事射抜いた」と答えるわけで、空氏も旧牟礼町の人々もまさかこの場所が江戸初期の「いのり岩」の地だとは知らなかつただろうが、結果的に絶妙なところにこれ而建てたことになる。しかも五メートルを超える高さの碑ゆえその天頂から見えるであろう北の海をイメージさせる名作である。

(13) 國學院本の描く五輪塔は、風輪・空輪が一体に描かれたり火輪の軒がない不自然さがあつたりするが、そもそも火輪の軒のない、ふちの尖った石塔はありえない。一般的な五輪塔を不正確に描いたものだろう。ところで、現地にある五輪塔は國學院本に描かれたものと形状がまったく異なる【**図18 二段目左**】。國學院本は基本的には写実的だと考えられるので、絵師の知識不足や記憶違いによるものではなく、現存の五輪塔と別物が描かれているとみるべき。もとあつた五輪塔が破損したりどこかに移設されたりして、近傍にあつた五輪塔がここに移された可能性を疑うべきか。

(14) 覚一本でも「越中次郎兵衛盛嗣を相ひ具して、小舟どもに取り乗つて、焼き払ひたる総門の前の渚に陣を取る」とあつて、平家方平盛嗣が焼けた総門前の渚に船を付けている。覚一本だけは総門の位置が他本と異なり、安徳天皇社の東側をイメージさせる

(牟礼ではなく)。盛嗣と伊勢三郎の言葉戦いは、覚一本では立石港のあたりである。盛嗣に続いて平教経が舟を漕ぎ寄せてくるので舞台は変わらず安徳天皇社周辺である。

(15) 本稿で考察した現地史跡の五輪塔は、すべて鎌倉期〜南北朝期のものである。よって、いずれにしても平安末期の屋島合戦の際の墓石であるというものはない。ありうるとすれば、後人によって次信、菊丸、大夫黒の供養塔として建てられたか、あるいはまったく無縁のものであるのに付会されたかである。このうち、菊丸の五輪塔についてはしばしば倒壊し、地元の方々が積み直しをされることが多い。インターネット上で菊丸の墓として紹介されている画像の多くには、石祠のみ写っていて五輪塔がないものが多いのは、このような事情による。昭和戦前の絵葉書にはかろうじて五輪塔の姿が確認できるが【**図18 三段目**】、現在では積み直しもできないほど摩滅している。

(16) 『源平盛衰記』の成立年次は一六世紀後半だと考える。近年、長門切の時代性の判明(鎌倉末期)によって、これと近似する本文を持つ『源平盛衰記』の内部に、かなりの古い層があるとの説も出されるようになった。しかし、一六世紀成立の『源平盛衰記』が参照した本文に——今は逸失した——長門切のような『平家物語』が存在しただけなのではないだろうか。それならば、『源平盛衰記』の成立が一六世紀であることは動かないことになる。『源平盛衰記』は、複数の『平家物語』の異本、『愚管抄』『吾妻鏡』などを参照して成立しているのである。それら参照資料の中に、古態の本文をもつ『平家物語』の一異本があっただけという考えかたであり、『源平盛衰記』自体が数世紀の時を経て成長してきたのではないと推察する。

(17) NTT東日本の『ハローページ勝浦・東金・茂原市』(二〇二一年版)によれば、千葉県北東部のいすみ市・山武市にイオチと読む「射落」「井落」「伊大知」姓が点在している。珍しいイオチ姓が異なる表記ながら同一地域に存在することから、発音イオチが変わらないまま用字が変化した事例とみてよい。

(18) 『翁媪夜話』巻四、『三代物語』には牟礼墓が神櫛王墓の「西」にあったのを池の「陂」<sup>つひみ</sup>の新造によって東に移したとするが、池

は王墓の南側に造られたのでそれならば移設の必要はない。「西」は誤りだろう。『全讃志』は「旧くは池の内」にあり、これが正しい。「内」を「西」と誤写した伝本が出回っている。

- (19) 國學院本の「次信やきは」の絵は、球体の墓石なのか、円盤形のそれなのか、あるいは火葬跡が円形の堅穴として史跡化されていたのか、判断が悩ましい。國學院本に描かれた家屋は遠近法が用いられており、そこから技術や描法を類推すると円盤や堅穴ならもつとそれらしく描きえたはずだと考える。そこで、暫定的ではあるが球体の墓石だと考えておく。実際には同時代にそのような墓石は存在しないので、周辺にあった破損五輪塔の水輪（球体）が墓石の扱いを受けたものと推測しておく。一方、当地の円盤墓として、明治期のものではあるが栗陰齋夫婦墓碑（厚さ三〇cm、直径七七cm）が洲崎寺境内にある（『牟礼町史』旧版（六五一頁）・新版（八二八頁））。ほかに、当地には円盤型の句碑、供養塔が点在している。

- (20) じつは、次信墓地公園の次信墓の裏、池の土手の手前に、いくつかの人間の頭部大の石で区切られた聖域的なところがあり、その中心にバレーボールくらいの球体の石が埋まっている。正体不明であるが、備忘録として記しておく。

- (21) 屋島と本土との間は生駒藩の時代（江戸初期）に完全に埋め立てられたが、一六四二年に入部した松平頼重が屋島合戦の古跡の喪失を嘆いて開削させ、相引川としたとする説がある。『香川県史』明治四二年版の「相引川」の項に「生駒氏ノ時、埋めて塩田となせしが、松平氏、封に就くに及んで塩田を廢し、その勝跡を存すと云ふ」（一二四頁）、『新修高松市史』に「現在の相引川は、三百数十年前の生駒時代（一五八七―一六四〇）高松市松島町の百石新開、春日町の春日新開、木太町の新開などとともに、埋め立てられていたものを、高松藩祖松平頼重の命によって、正保四年（一六四七）四月に、水路を通じたものである」（二八六頁）とあるものである。しかし、名勝図会卷四「相引」の項によれば、「生駒家の時、この処に堤を築きて塩浜となせしを、正保四年四月、国祖源英公の命によつて堤をもとのごとくなしたまふ」とあつて、「相引」地区に限定されているようであるし、しかも堤防を壊して元に戻した（見通しがきくようにした）に過ぎない。じつは、後者「相引」と前者「相引川」は大違いで、後者は高橋（見

返橋)から明神橋にかけての東岸一帯の地域名として「相引」と呼んでいるのに対して、前者は現状の相引川の全体が埋められたかのような記述になってしまっている。一六四二年の成立とおぼしき國學院本は松平頼重入部の年に描かれたと考えられるので、『香川県史』明治四二年版や『新修高松市史』の説明は覆ることになるわけである。なお、地名「相引」の由来については、地誌類で説が入り乱れている。

(22) 国絵図研究会(二〇〇五)が指摘するように、『天保国絵図』を天保年間の様子を写し取ったものと考えるべきではない。正保図、元禄図が下敷きにされている可能性が高く、天保図は部分的に古相を留めているようだ。ほかの古地図にしても同様で、重層的な成立事情を想定する必要がある。

(23) 現存史跡「赤牛崎」が名勝図会では「黄牛崎」と記されているが、『南海通記』巻三でも「黄牛崎」の表記で「黄牛」に「あかば」のルビが記されている。茶色の犬でもアカイヌと通称されるように、茶色の牛がアカベコである(会津地方の郷土玩具でも有名。「ベコ」は牛)。「全讃志」の立項名「驛牛崎」の「驛」はアカウシの意で、その本文に「黄牛崎」と記す。名勝図会も「黄牛崎」。古くはアカバコザキだったのだろう。表記は「黄牛崎」↓「赤牛崎」と変化し、音は、アカベコザキ↓アカバコザキ↓アカバザキと変遷したのだろう。

そもそも、現存史跡「赤牛崎」の地は現在地(赤牛橋の西)<sup>あかばし</sup>ではなく、明神橋のあたりだったようだ。ここには屋島から下る岬のような地形、すなわち「崎」がある。県図本の「赤ハサキ」は微妙だがそれでも「大ハカ」(神櫛王墓)に向かう岬にそれを描いているように見えるし、『香川県史』明治四二年版(一九〇九)も、「赤牛崎」を「同村同大字相引の西にあり」として、明神橋の西側と捉えており、昭和一〇年(一九三五)の『讃岐遊覧御案内図』も明神橋の北の岬状の地形に「赤牛崎」の文字を置いている【図21】。もとの「黄牛崎」「赤牛崎」の位置は、義経勢が阿波国から当地に迫って牟礼に到着したとのベクトル認識をもっていたものと考えられる。おそらく「義経鞍掛の松」との関係で、義経勢がその方向から屋島に迫ったと考えられたために、現在

の赤牛橋あたりが「赤牛崎」になってしまったのだろう。つまり「赤牛崎」の位置変更は、義経の動線がどのように認識されていたかということに関わるものと考えられる。

(24) 旧牟礼町内・旧庵治町内でも採石場ごとに石の成分は異なるとのこと、本稿で検討した五輪塔や史跡石の成分がわかれば、史跡の移動や認識の変化がより明瞭にわかるかもしれない。

### 参考文献

- 稲田道彦(二〇一五)『四国廻路道指南』東京・講談社  
 永年会(一九三二)『増補高松藩記』高松・山川波次  
 香川県神職会(一九三八)『香川県神社誌』香川・香川県神職会  
 国絵図研究会(二〇〇五)『国絵図の世界』東京・柏書房  
 狭川真一・松井一明編(二〇一一)『中世石塔の考古学』東京・高志書院  
 佐久間達夫校訂(一九九八)『伊能忠敬測量日記 第2巻』東京・大空社  
 高松市(一九六〇)『高松市史年表』高松・高松市  
 高松市史編修室(一九六四)『新修高松市史』香川・高松市役所  
 日外アソシエーツ編集部(一九九八)『苗字8万よみかた辞典』東京・日外アソシエーツ  
 日本石造物辞典編集委員会(二〇二二)『日本石造物辞典』東京・吉川弘文館  
 日本専売公社四国支社(一九七三)『塩田のおもかげ』高松・日本専売公社四国支社塩事業部  
 日本たばこ産業高松塩業センター(一九九二)『香川の塩業の歩み』高松・日本たばこ産業高松塩業センター

宮本洋一（二〇一九）『日本姓氏語源辞典 第二版』川崎：示現舎

牟礼町史編集委員会（一九七二）『牟礼町史』（旧版）香川：牟礼町

牟礼町史編集委員会（一九九三）『牟礼町史』（新版）香川：牟礼町

山川均（二〇一五）『石塔造立』京都：法蔵館

山口正（一九六一）「一段は果して六間か」『解釈』第七卷五号（通卷73号）

### 使用テキスト

『源平盛衰記』：久保田淳・松尾葦江校注（一九九一）『中世の文学 第一期 源平盛衰記7』東京：三弥井書店 ただし、表記については平明化をはかった。

『金毘羅参詣名所図会』：松原秀明編（一九八一）『日本名所風俗図会14四国の巻』東京：角川書店、三谷敏雄解説（一九九九）『版本地誌 地誌大系19 金毘羅参詣名所図会』京都：臨川書店

『讃岐国名勝図会』：松原秀明編（一九八一）『日本名所風俗図会14四国の巻』東京：角川書店、三谷敏雄解説（一九九九）『版本地誌 地誌大系19 金毘羅参詣名所図会』京都：臨川書店

大系20 讃岐国名勝圖會・前編』京都：臨川書店

『翁媪夜話』：香川県立図書館デジタルライブラリーによる。

『三代物語』：香川県立図書館デジタルライブラリーによる。

『全讃志』：安田健編『江戸後期諸国産物帳集成 第一六卷（阿波・讃岐・土佐・津島）』東京：科学書院

『屋島名勝手引草』：香川県立図書館デジタルライブラリーによる。

『香川県史』明治四二年版：香川県立図書館デジタルライブラリーによる。

『香川県史』明治四二年版：香川県立図書館デジタルライブラリーによる。

『香川県史』明治四二年版：香川県立図書館デジタルライブラリーによる。

**画像データ**

國學院本：國學院大學所蔵データによる。

県図本：香川県立図書館デジタルライブラリーより画像キャプチャーしデータ化。

洲崎寺本：洲崎寺からのデータ供与。

伊能図：国土地理院地理空間情報部情報サービス課地理史料係からのデータ供与。

天保国絵図：国立公文書館デジタルアーカイブより画像キャプチャーしデータ化。

金毘羅：『版本地誌大系19 金毘羅参詣名所図会』をスキャナー経由でデジタル化したもの。

名勝図会：使用テキストの『讃岐国名勝図会』の二書から摺りの鮮明な丁を選んで合成しスキャナー経由でデジタル化したもの。

牟礼村源平古戦場跡：洲崎寺からのデータ供与。

屋島壇ノ浦合戦図：洲崎寺からのデータ供与。

屋島壇之浦源平合戦図：架蔵の原画をスキャナー経由でデータ化したもの。

※いずれも、コントラストの明瞭化、ヨゴレの除去など必要最小限の加工を行った場合がある。

画像借用をご許可くださった国土地理院地理空間情報部情報サービス課地理史料係、高松市の青木睦男氏にあつく御礼申し上げます。  
執筆にあたってご教示くださったたり、画像データをご提供くださったたりした洲崎寺住職御城俊宏氏、高松市の郷土史家森昭宏氏、香川県神社庁上里昌史氏、高松市文化財課、高松市都市計画課、高松市公園緑地課、香川県立図書館参考調査係、合戦図についてご教示くださった伊藤悦子氏にあつく御礼申し上げます。